

書簡 (の一部) から見た ポール・ルイ クーリエ

宮原 信

はじめに

「ちょうど我々のような一介の平民にとって、出世の手段は、過去にあっても、現在にあっても、そして未来においても唯一つ、働くことしかないように、貴族階級の人間にとっても、そのための手段は唯一つしかない、それは... はっきり言おう、売春である。平民も、時としてその手段に訴えることがある、彼らが、宮廷人として振る舞う時だ。但し、それがさして成功するわけではない。」(ポール・ルイ クーリエ『シャンボール城購入募金について... 村議会議員への他意なき演説 Simple Discours...』1821年)(Maurice Allem 編纂, プレイアード版 *Œuvres complètes de Paul-Louis Courier*, 1964 p. 83)

ポール・ルイ クーリエ Paul-Louis Courier (1772-1825) とは、フランスで出版された各種のフランス文学史を見る限りでは(G. Lanson による『フランス文学史』は言うまでもなく、例えば、*Henri Lemaitre «Du Romantisme au Symbolisme 1790-1914» P. Bordas 1982* など)、19世紀初頭フランス王政復古下における著名なパンフレテールである。パンフレテール *pamphlétaire* とは、パンフレ *pamphlet*、つまり、「時の権威を攻撃、風刺する文書、小冊子」の作者だ。日本ではあまり知られていない、と言うより、私自身がこれまでまったく知らなかった人物である。ふとしたことで、私にもその文章のいくつかに接する機会があった。そして、その人物をよりよく知り

たいと思った。単に伝記だけによらずに、もっと直接に... そうだ、書簡を通して。以下の文章は、こうした単純な要求に少しでも応えようとしての試みである。

その前に、冒頭に引いた文章の書かれた歴史的背景について、簡単にふれておこう。

ワートルローでのナポレオン軍敗北の後、ブルボン王家がチュイルリー宮殿に戻ってきてから4年半ほどたった時、将来の世継ぎと目されていた、ベリー公が暗殺されるという事件が起きた(1820年2月)。王朝断絶を目論んだテロだったが、ベリー公夫人はこの時すでに懐妊していて、9月には無事男児を出産する。フランスでは、王座は男子にのみ許されたから、王子は、詩人ラマルチヌによっても「奇蹟の子 *l'enfant du miracle*」と歌われ、その誕生は国を挙げて祝われる。将来にわたって、王朝存続が保証されたわけである。

その頃、嘗てフランソワ1世がロワール川流域シャンボールに建てた広大な庭園を有する城が、買い手を求めている。それを生まれたばかりのプリンスに贈ろうという企画が、熱心な王党派を中心にして、持ちあがった。直ちに、資金調達のための募金が、個人単位、また地方自治体単位で始められた。

シャンボールの近くの村で、ブドウ畑を経営していたクーリエは、村の議会に差し出す意見書という形で、「募金運動反対」を主張した。クーリエの主旨はこうだ。「そのような募金に応じる資金があるのなら、壊れたまま放棄されている橋(具体的な場所が記されている)の修理をはじめとして、より有益な使い道がいくらかでもある。それに、王室の周囲を形成する宮廷世界は、以前から墮落しきっていて、そのような環境での養育は王子の人間形成にとって危険そのものでしかない。すべからく、王子もまた、一般人といっしょの公教育を受けさせるべきである。また、もし募金計画

が実を結んで、シャンボールに宮廷が出現することになれば、近隣住民の生活の変化、墮落を招くこと必定である。これは、住民たちの誰一人、望むところではない。シャンボールの城は、募金によって宮廷が取得したりせずに、いっそ『黒の集団 *la bande noire*』の活動に委ねるべきだ。」(*la bande noire* とは、革命時代、没収された亡命貴族の土地や邸宅、公共記念建造物などを買い入れ、解体し細分化して農民に売り、利益を上げた投機家集団。その後も存続し、経済的に不如意の大地主の土地を買い漁っては、それを細分化して農民に売り捌いていたため、貴族階層から憎まれ、恐れられていた)。

結局、財政の厳しいこの村が、募金に応じることはなかったが、熱に浮かされたような雰囲気の中で全国から集められた資金総額は、早々と必要な額に達し、クーリエの言葉を借りれば、「乳児歴6ヶ月 *six mois de nourrice*」の王子に、この高額な贈り物が与えられることが決定した。文章彫琢に充分時間をかけてのクーリエの意見書は、すべてが決着を見てから2ヶ月近くたってようやく印刷・刊行されたが、人々はこの遅れを意にかいせず、王党派に対して「たっぷり毒の盛られた」パンフレを楽しむことになる。(Robert Gaschet «P.-L. Courier et la Restauration» p. 117)

クーリエの文書は、「公衆道徳に背くもの」という曖昧な罪状で起訴され、『憲章』が言論の自由を保証するにも拘わらず、作者はサント・ペラジー監獄入獄2ヶ月、罰金200フランの実刑に服することになる。当時、体制を揶揄するシャンソン詩人として、国民の多くに愛されていたペランジェと、同じ入獄者同士として意気投合したのもその時のことであり、英雄的パンフレテールとしてのクーリエの名は、一躍知られることになる。

私が、こうした人物の人となりを知るのに、書簡を通してと考えたのは、クーリエに関しては数多くの書簡が残され、また数が多いばかりでなく、書簡を彼が、一種の文芸作品として考えようとしていたことを知ったからである。「クーリエ書簡集」は、現在どのような形で我々に与えられてい

るのだろうか。

クーリエの手紙の編纂、出版は、彼の不慮の死後(1825年4月、自家の下僕によって殺害された)、三つの段階を踏んで行なわれた。最初は、自身執筆活動を行い、多くのロマン派作家の出版を手がけた Auguste Sautélet (1800-1830) による2巻本がそれで、「*Mémoires, Correspondance et Opuscules inédits de Paul-Louis Courier*」と題され、クーリエの書いた手紙が203通収録されている(1828年刊行)。ただ、これらの手紙について後述の Geneviève Viollet-Le-Duc (以下では G.V.L.D. と略させて頂く) は、「当時の慣習に従ったとは言え、大部分の手紙に、編者の手が加えられ、クーリエの書いた手紙とは言えない」と断言している。

第二の段階は、Maurice Allem の編纂による、La Pléiade 版「*Paul-Louis Courier (Œuvres complètes)*」(1951年)中の「フランス、及びイタリアからの手紙 *Lettres écrites de France et d'Italie*」と題された部分で、ほぼ全面的に Sautélet の版を踏襲し、その他に、それ以後発見されたなん通かを加えて、全部で248通が収められている。(本稿で私自身が使用したものは1964年版である。)

第三段階(重要な新しい発見がなされない限りは、目下のところ最終段階と見なされよう)は、上記の G.V.L.D. 自身による、3巻本で、480通ほどのクーリエの書いた手紙の他に、数多くのクーリエ宛ての手紙、またクーリエに関係する公文書類などが豊富に収録され、全体で、870種以上の文書が集められている。それに加えて、この版では、Sautélet が手を加えた箇所などについても、その本来の形が示され、丹念な校訂版テキストとなっている。私も、以下の作業では多くの場合、この版に依拠するつもりである。但し、発信の場所、日付、また宛先については、G.V.L.D. ではなにも記されていないことが多いため、妥当だと考えられる場合には、目安の意味で、プレイアード版の記述を踏襲した。(Paul-Louis Courier Correspondance générale présentée par Geneviève Viollet-Le-Duc Tome 1 (1787-1807)/ Tome 2

(1808-1814)/ Tome 3 (1815-1825) 出版社と出版年代は、T. 1 Klincksieck 1976/ T. 2 Klincksieck 1978/ T. 3 G. Nizet 1986)

上で私は、クーリエが書簡を、一種の文芸作品とみなそうとしていたと述べたが、これは主として G.V.L.D. の意見に依るものである。彼女によれば、書簡集編纂作業の過程において、かねてからその存在が知られていた「Recueil des Cent Lettres 書簡百選」なるものの存在が実際に確かめられたという。大判のノートに、100 通ほどの手紙の写しが保存されていて、手紙本体の写しの筆跡はクーリエ自身のものではないが、それに加えられた訂正、注釈は彼自身の手になるという。さらに、この「書簡百選」の中から選ばれて、いくつもの下書きを伴い、なおいっそうの加筆、訂正、彫琢とも言うべき作業が加えられているものがある。G.V.L.D. は、クーリエがこれを刊行すべく、不慮の死を遂げるしばらく前に準備していたと考えている。いわば、未刊に終わった『1825 年版』である。(上記、G.V.L.D. による『クーリエ書簡集』第一巻の Introduction による。)

このように、書き手の思い入れのこめられた数多くの手紙の中からほんのなん通かを選択するのは、そもそも無理な話しでもあろう。そこで私としては、この際、クーリエが第一帝政期フランス軍の(1804 年以前は、「共和国軍隊の」)砲兵士官として過ごした年月に、対象を限ろうと思う。つまり、砲兵士官学校入学試験準備(1791 年)の段階から、主として南イタリアでの実戦参加の時期を経て、いったん軍を離れ(1809 年 3 月)、その後、多くの伝記作者の主張に従えば、「『大軍隊』の一員として、皇帝陛下の身近で戦うことに憧れて」ほんの一時ではあったが軍に復帰し、再び自らの意志で軍を離れた時期(1809 年 7 月)迄である。さらに、この間クーリエによって書かれた手紙の中でも、主として軍人としての活動に関した部分に目を向けたいと思う。(むろん、クーリエにとってもう一つ重要な問題、古典

古代に関する話題が、同じ手紙に登場することも珍しくはないのだが。)

このように時間とテーマを限った後、私なりにより特徴的と思われる手紙を十数編選び出して訳出する。そしてそれらに多少の注釈をつけながら、少しでも、クーリエという人間に近付ければというのが、私の意図するところである。(私の選択のいくつかは、偶然、上記の『書簡百選』、『1825年版』に選ばれているものと重なった。その都度、指摘するつもりである。)

ポール・ルイ クーリエの書簡13篇

(1) 軍人、同時に古典古代への道

『書簡集1.』[10] / 『プレイアード版全集』(II)

はじめにとりあげる手紙は、パリ在住のクーリエから、ツーレーヌに住む父へ宛てたものである。父 Jean-Paul Courier (1732-96) は、ある芳しからぬ評判の貴族ドロヌ公爵 duc d'Olonne の下で、波乱の数年を過ごしたあと(公爵の債権者であり、また公爵夫人の愛人でもあった)、ツーレーヌ地方で土地を買い、農地・森林の売買に従事、Langeais 近くの村に、ロワール川を望む邸宅 la Véronique をかまえた。クーリエ自身幼少期をそこで過ごすことになる。1784年には、一家ぐるみでパリに移住したが、この手紙が書かれた時期には、仕事のために父親は、再び la Véronique で暮らしていたようだ。

(Tours 近くの Langeais 在住の父親へ / 1791年9月29日 パリから)
『お父さん (Mon papa), 昨日水曜日, 9月28日, 僕はいつも通り, Labbey 先生のお宅に伺いました。先生は僕の面前で, 大臣からの書簡を受け取られました。今度 Châlons に設けられることになった砲

兵学校の教官にという、王からの任命状でした。僕にとって、先生をとられるのは、本当に口惜しい、残念なことだと、心の底からの気持ちを言葉巧みに (*expressivement*) 僕が述べると、それには先生も、かなり心を動かされたようでした。そのあと、ほんのわずかな時間考えただけで、僕は決心しました。つまり、先生と別れるわけにはいかない理由を説明したうえで、先生さえ許してくださるならば、先生のいらっしゃる所ならどこにでも僕はついて行きます、ときっぱり言ったのです。そんな僕の態度に、先生も悪い気はなさらなかったはずです。すぐその場で、すっかり僕の意を汲んで答えてくださいました。「私としても、シャンパーニュ地方には、知人も友人もないから、生徒のうちの何人かをいっしょに連れて行くことになるだろう。それに多分、*Châlons* に行っても、そこには一ヶ月とどまるだけで、またここに戻ってくる。そしてまたここに、二ヶ月ほどいられるだろう」と。そんな言葉で僕らは別れたのですが、先生はおお戸口まで僕を送ってこられながら、「よく考えてみよう」とも仰いました。

僕としては、もうこれ以上考える余地はありません、先生が辞令を受け取られた瞬間に、覚悟ができてしまったのですから。先生にも僕にも、ほとんど知り合いと言えるような人間が誰一人いない土地で、先生といっしょにいられる... これ以上に有利なことは、僕にとってないと思いますが、いかがお考えでしょうか。先生の仕事には、僕の勉強を効率よく見てくださるだけの、時間的余裕はきっとあるはずで、す。というわけで、お父さんも、僕の計画にとにかく仰りますまい。それにこんなこともありますね、かの地に行けば、そこは数学の中心地、いやでも僕は何度も試験官の目にさらされるし、四六時中、恐ろしく有能な先生たちや、これまで出会ったことのないような熱心な生徒たちに取り囲まれることになります。それに、場合によっては、将来、工兵科キャリアーのどこかの時点で、とんでもない障害にぶつか

らないものでもない。そんな時に、方向転換することで、かえってより有利な状況が、便宜が、生まれるかもしれない。ひょっとしたら、目を別の方向に向けることで、自分の納めた学問知識を役立てて、同じ軍職でも、別の分野に収まることができるかもしれません。もっとも、こんなことを言うからといって、なにも、僕がこれまでの計画を変えてしまったというわけではありません。要するに、お父さんも僕と同じ意見だというなら、僕を *Châlons* に連れていくかいかないかは、*Labbey* 先生のご意向次第なのです。ですから、もしお父さんが色々お考えになった末、僕の考えをよしとされるのであれば、お父さんの方から先生に、僕の面倒を見てもらえないかと一筆書いてくださるのが適当、と言うより必要だと考えます。僕の方でも、先生から受け入れてもらえるよう、できる限り努力します。先生は、かけ値なく、僕に対して好感を持たれているはずですよ。

お察しの通り、僕らは（訳注：母もパリにいたのだろう）お父さんの体力、健康の回復を心から喜んでます。この点では、僕たち、ずいぶん心配していたのですから。

お父さんからも、時には手紙を頂けると嬉しいな。僕の方からは、勉強の時間を割いて、その勉強の進捗具合なんかを、たっぷりお話しするのに、なんの差し支えもありません。』

定められた日、定められた時間、定められた場所でいつも通りのことが行なわれていた。そこへ突然、ドラマチックな変化が起きる。これまでいつも、父親の意見に素直に従ってきた19歳の青年が、この事件を自分のキャリア構築のための絶好の機会として捕らえ、愛情深い父親の首枷から解放され、羽搏こうとしている。より具体的には、これまで、将来工兵科の技術将校として身を立てるべく、一流の数学者を個人教師として父からあてがわれ、ひたすら勉学に励んでいた青年が、同じ技術畑とは言え、明

らかに異なる砲兵科将校への道を、パリを離れた、いわば異郷の地で目指そうというのである。工兵科から砲兵科への転換が父親の目にどう見えたかは、俄には断じがたいが、パリから、そして両親の膝下から離れるという息子の考えは、かなり思いがけないものだったに違いない。なんとか平和裡に両親に自分の考えを認めてもらいたいとクーリエは一生懸命である。

クーリエは、理路整然とした、同時に情愛の籠った言葉で父親を説得しようとするが、同時に、彼の態度は、毅然としていて、もはや反論を許さないかのようでもある。上の文章でも、終わりの方では、まるで父親の同意が既成事実であるかのように、穏やかとは言え、一種の命令口調にさえなっているのだ (「...が適当、と言うより必要だとさえ...à propos,... même nécessaire」)。こうした態度はまた、Labbey 先生とクーリエのやりとりを記す部分にも現れ、著名な学者に対して一介の青年が、悪びれることなく、対等の立場で接していることが感じられる (「心の底からの気持を、はなはだ言葉巧みに *fort expressivement* 僕が述べると...かなり共感されているよう...」)。

クーリエが父親に宛てた手紙には、さらに次の部分が付け加わっている。量的には少ないが、内容は重要である。

『これからは、僕は第一の目的のために、すべてを犠牲にするつもりです。かと言って、ギリシャ・ラテンの詩人たちを完全に捨て去るわけにはいきません。それだけは、いくら身を正そうとしたって、とうてい僕の力の及ぶところではありません。それに、この方の勉強に費やす時間が少なくなればなるほど、「棘ばかりの灌木の茂る森 *silvestribus horrida dumis*」(訳注：ウェルギリウス)の広がる野面を一瞬でも離れ、花々が咲き乱れ、あちこちに小川の流れる平原を散策する度毎に僕を感じる喜びは大きくなるのです。

Labbey 先生にとって、パリにとどまれる時間は、もういくらもあ

りません。ですから、もしお父さんが、先生に一筆書くべきだとお考えでしたら、もうぐずぐずしては居られません。』

クーリエが育った時代、男子に対する教育の中心は、依然としてギリシャ・ラテンの古代文化であり、クーリエ自身、幼いうちから、ラテン語を、続いてギリシャ語を、まず父親の手ほどきで、続いて近くの教区の司祭から習い始める。ただ、一般の家庭の場合とは違って、嘗て旧約聖書詩編の一部を、フランス語の詩に訳したこともある父親の熱心な指導もあって、息子は古代ギリシャ・ローマの世界の魅力にとりつかれ、のめりこんでいく。

この点については、もともとクーリエが、外国語に対して人一倍の関心、才能を持っていたことも想像される。後に、イタリア戦線で戦うさい、現地の言葉を習得しようとはしない同僚の中で、彼だけがイタリア語を理解し、そのお陰で命拾いもしたし、また、敵国の言葉である英語も、機会がある時には覚えようとしている。いずれにせよ、父親は、数学(実地への応用の面も含まれるのではないだろうか)と古典語を、息子の教育の二本柱として考え、しかも、前者について超一流の教師を与えたように、一家でパリに出てくるとすぐに、ピндаロス研究者としても当時有名だった Collège Royal 教授 Vauvilliers に、息子のギリシャ語教育を託しているのである。これから見ても父親が、一時の好みとか、見栄っ張りとは違ったなにかに基づいて、息子の古典語教育を考えていたことは確かだろう。クーリエは、こうした父の意向に素直に従ったばかりか、やがては、「あまりギリシャ語に時間を割くべきではない」という父の意見に反撥を示すようにさえなる。そして、ここに引かれているウエルギリウスの詩句は、彼にとって生涯を通じての指針の一つとなるのである。

最後に、「1791年9月 パリ」という日付、場所にも注意しよう。1791

年と言えば、6月に、ルイ16世一家が国外逃亡を試みて失敗した年である。国境付近からパリに連れ戻された国王は、一時王権を停止される。が、9月には国民議会によって、「人および市民の権利宣言」を前文に付した憲法が出来上がり、王はこの憲法に忠誠を誓ったうえで、王権を回復する。つまり、それはもはや、フランス国の絶対君主としてではなく、法に忠実な立憲君主としてであって、その正式な呼称も、「フランス人の王 **Roi des Français**」と規定されている(第2章、1節、第2条)。当時パリに住んでいたクーリエが、革命的な事件に対して、どのように向き合っていたのかを直接語る言葉は、手紙にはない。しかし、伝記作者の言うところでは、2年前、群衆のバスチーユ監獄襲撃の前段階となった、アンヴァリッドでの武器略奪に偶然とは言え参加もしている。そんな青年が、国王の逃避行にも関心を持ち、場合によっては、馬車に乗せられて連れ戻される国王一家を見ようと押しかけた群衆の中に混じっていたとしても、不思議ではないだろう。

この手紙からあと、入学試験に合格するまでの状況について触れておこう。翌年1月付けで、クーリエ自身が両親に宛てて送った手紙 [12] ([アラビア数字] は G.V.L.D. 編纂の書簡集、(ラテン数字) はプレイアード版、それぞれの番号とする) によって、我々は、Labbey 先生に同道するというクーリエの希望が実現し、秋に控えた入学試験に向けての先生の特訓個人授業が行われていることを知る。また同じ手紙で、Labbey 先生の忠告もあって、クーリエの希望が、工兵将校から砲兵将校へとはっきり変わったことも明らかになる。

さらに、Châlons 行きはクーリエの希望通りに実現し、翌年8月には最初の試験に合格、9月1日には、少尉候補生として Châlons 砲兵士官学校に入学を許可される。

ところで、希望通りに入学を許されるまでの間に、フランス、とりわけ学校のある Châlons の町を含むシャンパーニュ地方の情勢は、大きな変

化を見せていた。1792年4月にフランスに対して宣戦を布告したプロイセン軍が、パリを目指してこの辺りを通過したからである。授業は中断し、生徒たちも、幾門かの大砲を置いた町の城門を守るべく動員されたと言う。正式の勉強が始まったのは、プロイセン軍が撤退した10月になってからだった。こうした経験がどのような影響をクーリエに与えたかは断じ難いが、革命史上名高い Valmy の戦いで (同年9月20日)、革命軍がプロイセン軍を打ち破った際、フランス軍に新たに設けられた砲兵隊が大いに尽力したという情報などは、彼の関心をひいていたのではないだろうか。

(2) 駐屯地へ母からの小包

『書簡集1.』[21] / 『プレイアード版全集』(V)

はじめに母親の略歴を。クーリエの母 Louise Élisabeth と父 Jean-Paul は、ともにその父親が、すでに我々が見た duc d'Olonne の債権者として、その債権取り立てに苦労したという仲である。Élisabeth の父は、パリで紳士服製造業者として財を成したが、公爵に貸し与えた莫大な財産を、遂に取り立てることができずに世を去ってしまう。クーリエが二人の間に生まれたのは、1772年1月だが、何故かその時は父親不在の私生児として登録され、5年後1777年2月に二人は結婚する。洗礼証書も作り直され、クーリエは正式の嫡出子となった。何故このような回り道をしたのかは、解っていない。

砲兵学校で一年間の課程を踏んだクーリエは、1793年6月、砲兵学校を卒業、砲兵中尉として、最初の駐屯地 Thionville で、正式に軍務につくことになる。それから20年近く続いた、軍人としての生活のはじまりである。(Thionville はロレーヌ地方の町で、17世紀中葉以来フランス領だった。前年8月から10月にかけてフランス共和国軍はこの町で、フランスを脱出した亡命貴族軍とオーストリア軍からなる連合軍による包囲攻撃を受けている。)

（パリ在住の母親宛 / 1793年10月末, Thionville から） 市民クーリエへ *Rue de la Vieille Estrapade à Paris* 『僕はつい今しがた、近々一等中尉になるだろうという手紙を受け取りました。手紙の主自身はもう一等中尉で、彼と僕の間には他に一人いるだけです。ですから、Thionville に滞在するのも、もう6週間から2ヶ月というところです。その頃には、季節もすっかり進んでいるでしょうから、僕の合流する部隊も、冬期陣営の態勢に入っているに違いありません。そう考えると、ここから引き抜かれる無念も、多少は慰められる気がします。もしそうはいかずに、真冬の野営を強いられるとしても（こういうことだってないとは言えません）、それはそれで、僕にとってちょっと厳しい入門試練ということでしょう。聞くところでは、僕の所属する連隊は、今年ずいぶん苦しい目に会ったそうです。そしてその結果、これから次の作戦開始の時期までは、しばらく休息が与えられるという話です。』

1793年と言えば、1月にはルイ16世が、10月には、マリー・アントワネットが、革命政府によって処刑された年である。この頃、共和国軍は、主としてオーストリア軍を相手に、北フランス、もしくは現在のベルギー辺り、またアルザス・ローレーヌ地方、ライン河沿いの地域で戦っていた。上に述べられたクーリエの思惑は少しはずれて、彼が実際に Thionville の駐屯地を発ったのは、翌年の春になってからだった。

（前に続く）『お母さんが予め手紙で約束してくださっていたケース、数日前に受け取りました。なにもかもが、なんとも素晴らしい。ケースを開ける時、横にいた友人も、僕同様、布地を一目見るなり、その美しさに仰天してしまっただけです。チョッキやズボン、その他もろもろの衣類を仕立てるためのものですね。中のものを取り出すにつ

れ、ますます友人の賛辞は、熱を帯びていきました。書籍もそれなりに、誉められていました。僕としては、書籍の贈り物こそが、いちばんありがたかったのですが。でも、リボンや爪楊枝、その他さまざまな可愛らしい小箱（ずいぶんたくさんありました）が、一々ラベルをつけられ、目の見えない人にだって、母親の仕業だとわかるくらいに、きちんと並べられて出てくると、友人と僕、二人してお母さんのことを考えました。お母さんのやさしさが、こうして目の前に並べられた美しい贈り物の多さもさることながら、そのひとつひとつをいっそう飾り立てているかのような、なんとも嬉しい気遣いに、現れていたからです。友人は、大きな溜め息を一つ洩らしました。僕の目には、両親のいない気の毒なこの青年が、目の前の品物ではなく、僕にはお母さんがいることが、羨ましくて仕方がないと思っているのがはっきり見てとれました。』

クーリエが父に宛てた手紙で残っているのは2通に対して、母に宛てた手紙は、断片的なものを含めて6通残されている（他に、両親宛てのものが一通ある。なお、母は父の死後5年存命している）。そしてこの6通の多くにおいて、今我々が見たと同じような、戦地の息子への母親の気遣い、それに対する息子の感謝の言葉が記されている。（上に引いた文章などには、感情過多とも言えそうな表現が多く見られるが、そこには、母親に対する深い感謝の気持と同時に、クーリエが父親に対してもすでに持っていた、独立性のようなもの、あるいはむしろ、母親に対する同情のような感情が感じられるが、どうだろうか）。

いつなごき戦場と化すかもしれない駐屯地にあっても、20代の青年将校にとっては、仲間付き合い、それなりの社交は大切だったから、地方では手に入り難い品物を送ってくれるよう、首都在住の母に、かなり頻繁に依頼しているのである。ここでは、ズボンやチョッキに仕立てるための

布地や書籍をクーリエは受け取っているが、これはしばらく前に彼の方から出した注文に応じるものである。注文はこんな風に出される：

『最近お母さんが送ってくださった青縞のストッキングは、軍服に見事なほど合います。もう一足、同じものがぜひ欲しいのですが。』

1793年1月10日より以前、母へ [14] (VI)

また、クーリエはなかなかの洒落者だったらしく、母親にさまざまな品物をねだると同時に、得意な気持ちを伝えるこんな文面もある：

『僕のビロードのズボンは大いに役立つことでしょう。別の黒いのと2着で、僕の冬の盛装ということですよ。(中略) この部隊には、僕より金のかかった服装をしている将校も何人かはいますが、その連中にしても、僕ほどシックではないでしょう。なにもこれ、空威張りで言っているわけではありません。というわけで、お母さんもこの点に関しては、すっかり安心していいわけです。』(1793年10月、母へ) [20] (IV, 但しこの部分は *Sautelet* によって省略されている。)

一方、クーリエにとっては、母親はなんでも送ってくれる甘い母というだけではない。父親とは違った意味で、身近な体験を、包み隠さず語る相手だった。

『…最近僕は、同じ隊の下士官の一人の婚礼に呼ばれました。ここしばらく、僕は頻繁に強烈な頭痛に襲われ、その時も頭が痛くてたまらなかったのですが、一生懸命出ていきました。そんな時には、憂鬱な気分にしかなれません。事実そうでした。ほとんど、飲みも食べもしませんでした。いざダンスの時間となっても、僕はあらゆる誘いを断りました。包み隠しなく、本当の理由を言ったのですが、誰もそれでは納得せずに、僕がお高くとまっているのだと思ったようです。そんな気持は、僕には毛頭ありません。でも、もう数年前から、ダンスができないことほど僕を情けない思いにさせ、苛立たせるものはあ

りません。そしてこれに関しては、僕自身が悪いのです。

僕のためにイギリス風ブーツを *Forbach* に誂えさせるのなら、税を活用 *profiter de la taxe* しなくてはなりません。』 [21] (V)

「本当の理由」とは、「ダンスができない」ということだろう。クーリエは、結核を患いながらも、*paume* (テニスに似た球技) を好み、また、職業柄以上に馬術にもたけていたようだが、これまでにダンスは習い損ねてしまったのだ。また、「税を活用する」とはどういうことだろうか。イギリス風ブーツには、特別の税金が課されていたのだろうか。ただ、この手紙にも、クーリエと母親の関係がよく現れていることは確かだ。

(手紙の2枚目は上部が切り取られ、6行ほど削除されている) 『僕も、ご多分に漏れず、当直に際して虱を背負い込んでしまいました。なにか薬を使わなければ、厄介払いできないでしょうが、それだけは避けたい。でも、お母さんに、なにかいい考えがあればの話し、そうでなければ、結局は、そうせざるを得ないでしょう。

近々、約束した金額、確実に送ります。これまで遅れているのは、只、怠慢のせいだけで、他には何の理由もありません。

お母さんが、御自身に気がつかってくださると一つまり、僕に気をつかう人ということですが—僕も嬉しいな。お母さんが食べるジャムは全部、僕が食べているような気がします。

寝に行く前に、キスを送ります。おやすみなさい。お父さんからの手紙を、できる限り僕の方にも廻してください。お父さんのためにも、お母さんのためにも、そういつまでもツレーヌに鳥流しになんていなくていいように、願っています。そうですよ、どこに居ようと、僕ら3人、離れ離れに暮らしている限りは、鳥流しなんですから。』

[21] (V)

最後に、父親よりも母親に、自分のよりよき理解者を見出しているクーリエの文章を挙げておこう。上に引いた、生糸のストッキングをもう一足注文しているのと同じ手紙の一部である：

『お父さんは、僕がギリシャ・ラテンのような死語に時間を割くのは無駄なことだとお考えです。でも、本当を言って、僕は同じようには考えていません。たとえ僕自身の満足だけが、その目的であったとしても、これは僕の人生設計の中で、大きな割合を占めているのです。僕が、僕の人生の中で無駄だと考える時間、それは、過去の後悔、未来の恐れなしで、気持よく楽しむことのできなかったような時間だけです。まともに食べていく保証さえ得られれば、それで充分です。残りの時間は、誰にも非難できないような趣味に、絶えず僕に新しい喜びを提供してくれる趣味に捧げるつもりです。そんな風には考えない人が大勢いることは、僕も知っています。でも、その人たちの考えは間違っていると思いました。なぜなら、ほとんど全員が、自分たちの人生が幸せではなかったことを認めているからです。僕のこんな人生観は、お母さんの笑いを誘うかもしれません。でも、お母さんなら、僕の書いたことすべてを、僕の本当の気持と受け取って、今後は僕の実際の行動もそれに従う筈と考えてくださいますよね。』1793年1月10日以前、母への手紙から [14] (VI)

父が導いてくれたはずの古典古代への道を、今度は、父の反対を押し切ってまで、より究めようとする。「まともに食べていく保証」を与えるものとして、クーリエにとって軍隊は適当なのだろうか。そんな危惧を孕みながらの、人生の出発である。

(3) 上官の過ちを手際よく処置

『書簡集1.』[25] / 『プレイヤー版全集』(VII)

(在 *Sarreguemine(s)* 砲兵基地を指揮する大尉, 市民アリックス *Allix* 宛 / 共和暦 II 年フロリアル 10日=1794年4月29日, *Bliescastel* から) 『我が親愛なる友よ, 市民 *Dieudé* から, 僕も君と全く同じ命令状を受けとった。ただ, 君への命令状には彼がまずいことに省いてしまった説明文が, 僕へには載っていた。君が, 僕への手紙の中で引いている条項の後で, こんな風に付け加えているのだ。「言うまでもなく, 君はただ, 君の手の届く範囲にある師団 *divisions* についての状況報告書を送ってくればいい。君のいちばん近い隣人である *Allix*, *Alexandre* 両市民と連絡し合って, 彼らと君の間の境界線をはっきりさせ, 3人が同じものを集めたりすることがないようにしてくれ給え。」僕に言わせれば, わずかこれだけの言葉が, 忘れず書かれてさえいれば, 君の仕事の範囲もはっきりしただろうし, *Dieudé* にしたって, そう書くことで, 僕と同じように君にも, むだな手紙の労を省かせ, 受け入れて, もらえるかどうかもわからないような要求なんか, させなくてすんだはずなのに。僕は君からの手紙を, *Moreaux* 将軍には届けさせたくれど, 君が市民 *Miché* と市民 *Marescot* に宛てた手紙は, 留めてある。前者の身上報告書は君の手許に届くだろうし, 後者は, *Kaiserslautern* の大砲集積場を取り仕切る *Mathieu cadet* の管轄下だ。僕自身はといえば, 関係があるのは, *Chapsal* 将軍の師団だけで, その司令部がここに置かれている。

Alexandre は, *Desbureaux* 将軍関連のすべてを集め, *Mathieu* は, *Ambert* 師団を取り扱い, 残りは君の管轄ということになる。』

市民 (*citoyen*) とか, フロリアル (花月 *floréal*) とか, 共和国の匂いの強

い手紙だ。この年の4月から8月までは、ロベスピエール独裁による恐怖政治の時期であり、共和国軍隊は、主として北フランス、今のベルギー、ムーズ川、モーゼル川、ライン川地方で、オーストリア軍を敵にして戦っていた。クーリエにとってとりわけ重要になるイタリア戦役は、まだ先の話しである。

市民と呼ばれているが、Dieudé はクーリエに命令を下す立ち場にある上官の一人だ。その上官が犯した過ちに対して、きびきびと対応する。過ちの具体的な内容まではわからないが、後に何度か彼が上官の態度に対して見せる毅然たる態度をも予測させる手紙である。

(4) ローマ共和国で

『書簡集 1.』 [43] / 『プレイアード版』 (XIII)

1794年から95年にかけて、ドイツ戦線での過酷な冬を体験したクーリエは健康が悪化し、6月には大尉に昇進すると同時に、南西フランスに於ける鑄造所視察官という後方勤務を命じられる。(Michel Crouzet, *Une écriture du défi, Kimé 2007* による。Crouzetによれば、「無断で戦線を離れたため、脱走の罪を問われそうになったクーリエに、友人たちが手を尽くしてなんとか体裁を整え、このような役職が与えられたという伝説は間違いで、クーリエの健康状態を考慮した公安委員会の一メンバーの計らいだった」。)翌96年5月には、Toulouseに派遣され、98年1月まで同じ役職につきながら、当時フランス全土、とりわけ南フランスで顕著だった、総裁政府 (le Directoire) 下の華やいだ雰囲気、25歳のクーリエも楽しむ。そしてその時彼は、何人かの若い友人を得るが、その中の一人、ポーランド出身の Klewanski (Clewaskiとも綴られている) が、これから我々の読む手紙の宛先人である。二人は、古典古代に対する共通の関心を通じて気が合い、多くの時間をいっしょに過ごしたことが、後の手紙からも伺うことができる。

ところで、クーリエが後方勤務に廻されていた時期は、イタリア派遣軍

司令官ボナパルトが、次々と勝利を収めていた時期でもあり、クーリエがその後、パリでの休暇、イギリス方面軍司令部での勤務を経て、砲兵科納品監督官として、1799年1月にローマに着任した時には、ローマ、ナポリともに共和国として成立し、ミラノを首府とするチサルピナ共和国を始めとするいくつかの姉妹共和国の形をとりながら、ほぼイタリア全土がフランスの勢力圏にあった(イタリア戦役を終えたナポレオンは、その勝利の理由の一つとして、「砲兵隊の卓越」を挙げたというのが《本池立『ナポレオン 革命と戦争』世界書院、1992年、47ページ》、これは、クーリエの砲兵士官としてのキャリアが、この段階からすでに、本道から外されていることを感じさせる)。目下のところ、ローマ駐屯のフランス軍の敵は、今なお抵抗を続けるナポリ王朝とその支持者たち、また彼らを支援するイギリス軍だけだったのである。

ローマに着任したクーリエは、早速、しばらく話すことを禁じられていた人間のように、止まることなく語り始める。

(Toulouse 在住の Klewanski へ / 1799年1月8日ローマから 手紙の最後に、改めて、「1799年1月14日ローマから」と記されていて、この手紙が、一度に書かれたものではないことを示している)

『拝啓 (Monsieur)、途中、まずはじめはリヨンに、続いてミラノで立ち止まるからと予告しておきながら、こうしてローマから書くことになってしまった。君からの手紙が、一週間もすれば僕のもとに届いていた幸せな国から、こんなに遠くまで放り出されて、まだぼーっとしたままのさ。どうしてこうなったかわからないけど、またまたすっかり戦士様に早変わり、つまり、「腰落ち着ける席とてもなく sine sede」, 「(スキタイ人さながらに) 行くへ定めぬ車に載せて、我らが住居をば運びいく *quorum plaustra vaga rite trahunt domos*」というわけだ。』

相手も知っているはずのホラティウスの詩の一節を、ほぼそのままラテン語で引用しながら無沙汰を詫びた後、ますます高揚する文体で、『勝利の女神に攫われていく僕ら征服者たちの明日をも知れぬ不確かさ』が歌われる。

『ですから、素晴らしい一通を頂いてからというもの、すっかり私にとっての生活必需品となったあなたからのお手紙を今後も頂くために、私の住所を差し上げようとしても、少々困ってしまうのです。それというのも、勝利に酔い痴れる我ら征服者たちにとっては、今日という日をどこで終えるかも、明日という日をこの世で迎えられるかも、確かではないのです。我らが求めるのは名誉、そして見出すのは死。ここらでもう、打ち止めとしましょう。このような文体では、私はひたすら高く、遠くへと引きずられていくばかりです。でも、こういうことすべてから、その生存すら常に疑わしい人間に手紙を書くのはむだな骨折り、などと結論しないでください。それより、私が死者の仲間か、生者の仲間かなどは気にせずに、近々手紙を一通、「ローマ方面軍司令部」(この世の一部です) 気付けで私の名宛に出して頂けるとありがたい。今とは別の仕事が与えられれば別ですが、その手紙はきっと元気な私の手許に届き、幸せな気分を誘うに違いありません。

ホラティウスが、「*morte venalem*」(命と引き換え) と呼ぶ栄光の月桂冠も、ここでは他所より安価に手に入る。私の頭にかぶせられているいくつもの冠も、さしたる苦勞もなく手に入ったもの、いや、これ本当の話です。今ではもう自由に振る舞い、逃げるナポリ軍兵士を追ったりはしません。今こうして私があなたに手紙を書いている間も、彼らはガリリアーノ河の向う側。敵を求めて、わざわざそんな遠くまで行ったりはしません。追う価値もない連中ですから。彼らの敗北の話は、新聞かなにかでお読みになっていることでしょう。

それ故、我も、なにも語らず、
さらに一段、劣れるを、恐れる故に。

(*La Fontaine* の *Contes et Nouvelles* 第一話 *Joconde* から)

あなたに話して聞かせたいこともないではないけれど、それはあなたの町の運河を縁取るポプラ並木の下でのこと、手紙に書くようなことではありません。

同じような理由から、2週間を過ごした *Lyon* についても何も語りません。楽しみもなければ、苦勞もない2週間、つまりは、ストア哲学者たちに従えば良き2週間、エピクロスに倣えば、厭うべき2週間だったのですが。

サント・ブーヴはこの手紙を引いて、「後に手を加えられたと思われるこの手紙は、クーリエの才能が、その奥行き (*tout son relief*)、優雅さ (*toute sa grâce*) を、余すところなく我々の目の前に繰り広げてみせている最初の手紙だ」と評したが (*Sainte-Beuve Causeries du lundi, Le Constitutionnel*, 1852年, 7月6日), 上の部分のような、クーリエ自身も言う「高揚した」文章も、その視野に入っているのだろうか。この、いわば「序章」の後に来るのは、ミラノを中心としての、性風俗の記述だが、読み手が気のおけない若い友人という安心感からか、きわどい表現が並べられている。きわどく、かつ難解さは、私などの手には負えない。識者の目に呈する意味で、その一部の直訳を試みておく。

『ミラノは、フランス人が主人になって以来、文字通りイタリアの首都になった。ここが今では、「お山の向うで」、焼きあがったパン (*du pain cuit*) と、フランス式女性、つまりは (ほとんど) 裸の女性が見られる唯一の都市なんだ。それと言うのも、イタリア女性はみんな、着込んでいる、冬でも夏でも。これは、パリの流儀とは反対だよ。我が軍がイタリアにやって来た時、用心せずにうっかり地元の女たちに

接したり、地元のパンを食べたりした者、そうした連中は、ひどい目にあつたもんだ。ある者は消化不良で四苦八苦、またある者は、はなはだ不愉快な日々を「(垂れ) 流す」ことになつたのだ (最近のもの言いが、こんな時には実にうまい言い方を提供してくれるね)。ラ・フォンテーヌの獣たちのように、

みんなが死んだわけではなかったが、

みんながあれにやられていた

というわけで、我が方の男たちの大半が、土地の風習に従う腹を決めたんだが、...』

最後の引用は、フランスの子供がみんな習うラ・フォンテーヌの詩句だ (《*Les Animaux malades de la peste*》から)、原文 **frappés** (「ペストに罹つた」) をクーリエは悪戯して、**poivrés** (俗語で「性病に罹つた」) に変えている。これは穏やかな部類だが、それでも、クーリエの書簡の最初の編者 **Sautelet** は、ラ・フォンテーヌの通り、**frappés** に戻している。

『中略』(クーリエは、数行にわたって同じ調子で話しを続け、キケロの「紙は赤面せず *Charta non erubescit*」) という文句を引用した後、今度は中央政府から送られてきた高位の役人 **Méchin** 夫妻をこきおろしにかかる。そのための手段は、「言葉遊び」である。

『二人して、怪しげなイタリア語を操りながら、せっせとイタリア人の皮を剥いているというわけ、但し夫婦それぞれ別の剥き方で。奥方は、「レムス (訳注：ローマの建設者) の貴き末裔の皮を剥き *illa glubit magnanimos Remi nepotes*」, 旦那の方は、「余はフランス共和国陸軍の財務官也」というわけ。』

《**écorcher**=動物の皮を剥く》は、同時に「①不正確な外国語を話す
②金銭を不当に巻き上げる ③《**écorcer**=樹木の皮を剥く》とともに、

卑猥な意味」を持つので、原文の『*Tous deux écorchent l'italien*』が上のようなことにもなるのだ。(このような受け取り方は、考え過ぎだろうか?)

続いてクーリエは、Méchin 夫人をはじめとして、ローマの名門家系に出入りするフランス人女性たちの滑稽さに触れ、さらにローマの上流階層の、本来敵であるはずのフランス人に対する迎合ぶりを語る。

『いくつかの、イタリアきっての名門家系が、自分たちの邸を開放して、フランス人と仲良く暮らすため、卑屈な行為に走っているけれど、そうした行為は多くの場合、なんの役にもたっていない。こうした連中は、我々の破壊した政府に対する、もともと不満分子か、それとも、周囲の事情から、破壊の後の混乱を喜んでいるかの如くに見せざるを得ないのか、それとも、自身の祖国を憎むあまり、それを引き裂く我々に手を貸して、彼らのために残しておいたボロ切れに、飛びついているのさ。ミラノでの Serbelloni 家、ここローマでの、ボルゲーゼ家、サンタ・クローチェ家がそれ。この家のプリンセスは、彼女を知りたいと思った人間なら誰でも知っている「絶世の美女 *formosissima mulier*」, 但し、評判より、少なくとも才気にかけては遥かに劣る。その彼女も、息子をフランス軍の軍人として、働かせた。息子も、名誉の負傷、そうなると参謀副官 *Adjutant général* くらいには任命される資格が出てきたというわけ。

ボルゲーゼ家の二人の息子は、ほぼ同等の名誉を、もう少し安い値段で手に入れたけれど、我慢のできる下僕にさえなれそうもない悪ガキ。彼らを腹の底では軽蔑している人間に向かって、そうとは知らずにやたらと投げかけるへつらいの、なんと不器用、平凡、粗雑なことか。爾余の者は、名を挙ぐる名誉にも値せず。(Le reste ne vaut pas l'honneur d'être nommé. Corneille, Cinna, V 幕, i 場)』

こうした中で、クーリエにとって救いとなる事件が起きる。石碑文研究者である、イタリア人神父との出会いである。

『そんな土地でも、僕には、はなはだ気持のいい知人が一人できた。しかも人からの紹介状もなし、これはフランス人にとっては、難しいことなのさ。ある日僕がひとりで、ヴァチカンの美術館と図書館の、戦火からも無事だった部分を見に行った時、そこで、マリニー神父に出会ったのさ。この神父は、嘗て教皇庁の古文書庁長官をしていた、古代の言語にかなり造詣の深い人だけれど、それよりなにより、碑文字学に秀れ、その著作は高い評価を得ている。誰かがこの人の名前を口にしてるのが聞こえて、もしやその人と思った僕は（あるドイツ人の作家のラテン語で書かれた序文に、彼の著作が引かれていたのを思い出したのでね）、思いきって話しかけてみた。さいわい神父は、フランス語にもかなり堪能で、僕の問いかけにも、きちんと答えてくれた。それから数分の会話の後、僕を自宅に連れて行ってくれたのだけれど、そこには、今でも僕が自由に使わせてもらっているみごとな図書室、古代遺物の陳列室がそなわっていて、たくさんの絵画、素描、版画、各種の地図類といったものが置かれていた。今では僕は神父とは昵懇の間柄、セネカの言う「最初に入室を許される友人 *primae admissionis*」の一人、お蔭で僕のローマ滞在は実に快適なのさ。』

『中略』（Klewanski にも関心がある、石碑文についての逸話が語られる。クーリエが、自分の知識で、その道の専門家を驚かしたというのである。）

終わり近くでクーリエは、ローマの民衆の苦しみ、そして彼らと同等にひどい扱いを受けている数々の遺跡について述べることを忘れない。

『ローマを見ておきたい人間がいたら、急ぐように言ってくれ給え。日ごとに兵士の剣とフランス人役人の牙が、この町の美しい風景を台

無しにし、身に帯びた飾りを剥がしているからね。古人の、自然で高い言葉遣いに慣れている君には、剣だ、牙だといったこのような言いは、あまりにもあでやか...どころか、化粧の度が過ぎるとさえうつるかもしれないね。でも、かと言って、君が、嘗て、華美を極めたその姿を目にしたこのローマが、哀れにも落ち込んでしまった荒廃、悲惨、汚辱の悲しみを、いったいどんな言葉で言い表わせと言うんだい。今人々は、町の廢墟をすら、さらに破壊しようとしているのだから。君も知るように、昔人々は、世界のあらゆる国々からここへやって来た。一冬の滞在だけのためにやって来ながら、一生をここで送ることになった異国の人間の、なんと多かったことか。今この町は、逃げ損ねた者たちか、さもなければ、短剣片手に、かくも何度も繰り返された、ゆすり、強奪の手をなお免れた財貨があればと、飢えに苦しむ民衆のぼろ着の中をまさぐる輩を残すのみ。細かく述べれば、尽きることがない。それに、色々な制約があるから、すべてを君に語るわけにはいかないのさ。しかし君なら、描くべき絵のほんの一端を素描して見せるだけで、残りの部分を見抜くことは容易のはずだろ。

パンはもう、どこでも売っている品ではなくなった。各自が手に入ったものを、命を賭して守っているよ。「パンとサーカスを *panem et circenses*」とはご存知の言葉、彼らは今や両方ともを、そして他にも多くのものを、与えられることなく過ごしている。政府派遣の役人でも高級士官でもない者、また彼らの、あるいは他の、下僕でもなく、廷臣でもない人間は、鶏卵一つ口に入れることができない。生きるがためには不可欠な品すべてが、ローマ人にとっては高嶺の花、他方、ある種のフランス人たちは、最高に裕福な人間というわけではないのに、気前よく誰彼かまわず、大盤振る舞いしている。そう！ 僕らは今こそ、嘗てローマによって征服された世界に代わって、その仇を討っているのだよ。」

最後に、ローマの町や個人の庭園にあった記念建造物の破損、破壊、略奪、また、教皇庁図書館所蔵のマニュスクリの破損などが語られるが、古典古代の世界に対するクーリエの愛着が、いかに強く、心からのものであったことがはっきり感じられる文章である。

はじめに述べたように、サント・ブーヴは、この手紙の「奥行き」「優雅さ」を賞賛したが、アルマン・カレルの口調は、熱狂的でさえある。

「これら最初のイタリアからの手紙のなん通かは、熟年クーリエの文章の中でもっともよく知られたものに見られる《勢い *verve*》が、《独創性 *originalité*》が、そなわっている。その一通、一通が、言葉の《優雅さ *élégance*》、《純粹さ *pureté*》という点での傑作である。」と、表現の上でも賞賛するばかりか、内容的にも、他に先んじての独自性を指摘する。

「他の誰よりも 10 年も早く、我らが革命のもたらした災厄を、より高貴な表現では、軍人精神と称されている、侵略・破壊の精神を凝視した」というのである。(Armand Carrel *Essai sur la vie et les écrits de P.L. Courier*. 1829 年版全集付記の『略伝』)

(5) 皇帝陛下を作る

『書簡集 1.』 [71] / 『プレイアード版全集』 (XXIII)

ローマ在住物資納入監督官としてのクーリエに許された、比較的穏やかな、そして余暇にも恵まれた生活は長くは続かなかった。再び力を盛り返したナポリ王国軍の前に、フランス軍は各所で敗北、同年 (1799 年) 9 月末には、ローマからの撤退を余儀なくされた。クーリエも、命拾いの経験をしながら、捕虜という資格でイギリス軍の船に乗せられ、マルセイユに戻る。それ以後、パリでの咯血、病床、ツーレーヌでの回復期、母の死、ストラスプール赴任、古典古代学者たちとの交際の時期を経て、1803 年 12 月には、イタリアの町ピアチェンツァに司令部のある騎乗砲兵第一連隊に少佐 (*chef d'escadron*) として合流するよう命じられる。ピアチェンツ

ァは、ミラノの南東50キロほどの町で、当時は、フランスの領土タロー県 (le Taro) の一部だった。クーリエは、ちょうどそれから3ヶ月後の翌年3月18日に任地に到着するが、途中アルプス越えがあったとは言え、いかにも悠長な旅である。そして着任後2ヶ月ほど経ったある日、連隊長が士官全員を召集する。

(Nへ / 1804年5月...日, ビアチェンツァから) 『我々は今、皇帝陛下を一人つくってきたところ。僕としても、邪魔立てはしなかった。話しはこうだ。

今朝、連隊長 *d'Anthouard* 大佐が我々を集合させ、その上で何が問題かを説明した。しかしその語り口たるや、前置きもなければ結論もない、ぶっきらぼうそのもの。皇帝か共和国、どっちが君らの好みかね？ まるで、肉は焼く？ ボイルする？ ポターージュかい、スープかい？ とでも尋ねるみたい。大佐の訓示が終わると、一同、円陣を組んで腰を掛けた。さあ、諸君、ご意見は？ 一言のご意見もない、口を開く者はない。15分、あるいはそれ以上沈黙が続いたかな、大佐にも、みんなにも、気詰まりな雰囲気になってくる。と、ようやく、*Maire* という青年が、君もどこかで会ったことのある中尉だ、立ち上がってこう言った、「あの人が皇帝になりたいと言うなら、なるがいいでしょう。但し、私の意見を申しますなら、まったくもって良からぬことと考えます。」大佐曰く、「はっきり言い給え、賛成？ 反対？」*Maire* は答える、「反対。」「そりゃ結構。」

再び沈黙が... またまた、まるで互いが初対面であるかのように、一同ひたすら様子を伺う。もし僕が口を開いていなければ、今でもそのままの状態が続いていたことだろう。僕曰く、「諸君、私の考えに誤りがないとすれば、思うにこの問題は我々には関係がない。国民が皇帝を欲しがっている *La Nation veut un empereur*。我々がそれに

ついて、とやかく討議すべきだろうか？」この論拠は、実に強靱、わかりやすく、地について (*ad rem*) いた... これ以上、どうしろと言うのか。全員が僕の意見に同調した。およそ演説者が、これほどみごとに聴衆の賛同を得たことはなかつただろうね。一同立ち上がると、署名をすませ、ビリヤードをしに部屋を出た。Maire が僕に話しかけてきた。「恐れ入りました、少佐殿、キケロもかくやと思われるお話し振り。それにしても、少佐殿はなんでまた、あれほどまでに、皇帝の誕生をお望みになるのです？」「早いとこけりをつけて、ビリヤードをしたかったのさ。あのまま一日座らせられるのはご免だし。君はどうしてまた、反対なのかね？」「さあ、よくはわからないのですが、あれは、もっとまじな男と考えておりましたから。」

中尉のこの言葉、僕にも、そう的外れとは思えなかった。実際、これはどういうことなのか？「あれほどの人間」が、「ボナパルト」が、「いくさ人」が、「万軍の総帥」が、「この世で最良の指揮官」が、今度は、「皇帝陛下」と自分を呼ばせたがるとは？「ボナパルト」でありながら、「朕」になりたいとは？「(頂きまで登りつめれば) 降りたいと願うもの *Il aspire à descendre*」(Corneille, *Cinna*, II 幕, i 場) なのだろうか？

そうではない、国王たちと肩を並べれば、格があがると思っているのさ。名前よりも肩書きの方がありがたいのさ。気の毒な男！さまざまに幸運に恵まれながら、運の良さには見合わない、ちっぽけな考えしか持てないとは！もっともこれは薄々感づいていたこと、あれが妹をボルゲーゼ家に片付かせ、その縁組みを身に余る光栄と思込んでいるのを見せつけられた時以来ね。

大変な騒ぎ、というわけではない。誰にもまだ、これがどんな結果を生むことになるか、よくはわかっていないからね。誰もたいして気にもしないし、たいした話題にもなっていない。でもイタリア人たち

は、ほら、君もご存知、ドゥマネルに宿を貸しているメンデッリなんかは大声で言った、「こりゃまたひどく飛び跳ねたもの。旗持ちが、コルシカの山羊番が、皇帝陛下様とは！ いやはや、こんなことってあるのかい。こりゃつまり、コルシカ男がひとりして、フランス中の男の、キンタマを引っこ抜いたっていうわけか！」(訳注：「…」の部分は、原文イタリア語)

ドゥマネルなんかは、部下を集めることすらしないだろうな。ただ、集めた署名に、「陛下への熱狂、献身を、等々」と書き足して送るだけ。

以上が我々のニュース、君の今いる国ではどうだ、茶番劇はどんな風に演じられたかな？ たいした違いもなからうが。

各人が、恐れおののき、口づけす、

我らをば鎖でつなぐその手をとりにて。

(『カエサルの死』ヴォルテール、II 幕、ii 場、ブルータスの独白)

作者先生には失礼ながら、これは嘘。誰も、恐れおののいたりはしないもの。欲しいのは金、見返りの望める手にしか口づけはしない。

このカエサルは、この間の事情をよりよく心得ていたし、人間としても、別格だった。使い古しの称号などは採用しないで、自分の名前そのものを、王という称号よりも尊いものにしたのだ(訳注：ローマのユリウス・カエサルを指すと考えた。それともむしろ、「このカエサル」は、これまでのナポレオン自身のことだろうか？ その場合には、「別格」ではなく、「別人」と訳したいが。原文は以下の通り：Ce César l'entendait bien mieux et aussi c'était un autre homme. Il ne prit point de titres usés, mais il fit de son nom même un titre supérieur à celui de roi.)。

それではさらば。我々は、君の当地ご到来を待ってるよ。』

歴史の一場面に立ちあっているかのような、もしくは、歴史小説の一こ

まを読んでいるような印象を持たないだろうか。事実この手紙は、クーリエが死の年まで何度も書き直し、多くの下書きを残したものの一つであり、さらに、はっきりした宛名もないところから、はじめからフィクションとして書かれたものとする人も少なくない。

この頃のフランスの状況を概観しておこう（以下は主として『ナポレオン 革命と戦争』本池立によった）。大多数の国民によって受け入れられたブリュメール 18 日（1799 年 11 月 9 日）のクーデター以後、第一統領のナポレオンは、「革命の子であると同時に、親殺しとして」30 歳の若さで事実上の国家元首となる。それからさらに、ヴァンデ地方での反革命反乱の鎮圧、イタリア戦線での勝利を経て、フランス国民の間で彼の人気は、ますます強固なものとなる。同時に、独裁者への歩みの姿勢も次第に鮮明となるが、それは他方で、議会や参事院といった、彼を取り巻く「熱心な支持者たち」の行動によって助長される。護民院の提案による、ナポレオンに対しての、「フランス全国民の謝意の表明」（1802 年 5 月）、立法院、護民院においての、「終身統領制」のはほぼ全会一致での可決などがあるが、1804 年には、ブルボン家のプリンス、アンギャン公の拉致、処刑（3 月）が行われる。それと同時に、同じ 3 月末には、元老院が、「あなたの業績と栄光を永遠なものにせよ」つまり、「皇帝になれ」とすすめて、5 月 3 日には、護民院が帝政を承認し、18 日には元老院が、憲法を改正して、皇帝ナポレオン誕生を宣言するのである。

『第 XII（1804）年の憲法』第 1 条には、「共和国の統治はフランス人皇帝の称号を帯びる皇帝に委任される」とあり、第 2 条には、「共和国の現第一統領ナポレオン・ボナパルトはフランス人の皇帝である」と記されているから、この文面を読む限りでは、「共和国はこれまで通り存続し、たまたまその被委託人がナポレオンである」と受け取れないこともないだろう。しかし実際には、今や共和国は、アウグスト帝、カール大帝に比すべきナポレオン皇帝にとって代られたことを、誰も疑わなかった。

この変更は、これまでもナポレオンがしばしば行なってきたように、国民投票にかけて可否を問われることになる。もっとも、問われたのは、「帝政」そのものではなく、「皇帝の座のナポレオン家内部での世襲制」の可否についてだった。投票の結果は、8月2日に発表されたが、反対2,579票に対して、賛成3,521,675票という数字だった。クーリエのこの手紙には、もともと日付も発信地も記されていない。従って、この手紙を書く段階で、クーリエが、どの程度フランスにおける状況を知っていたかは定かではない。ただ、こうした数字は別としても、ナポレオンの圧倒的人気は、充分承知していたと思われる。「国民が皇帝を欲しがっている」と言う時、クーリエは、もはや自分が、動かしがたい状況の中に捕われているのを、強く感じていたのだろう。若い中尉のように反対したところで、今さらなんになるだろう。それに、もし反対を押し通そうとするなら、どのような犠牲を払わなくてはならないかも、最近ナポレオンが何度かにわたって示した弾圧の事例が、十分に警告している。そうした中で、クーリエに可能な抵抗は、皇帝陛下という「畏れ多い」代物を、ピリアードと同列に、もしくはほんの少しその下位に置いてみせるぐらいのことでしかなかったのだ。

アルマン・カレルは前掲書、『P.L. クーリエの生涯と著作に関する試論 *Essai sur la vie et les écrits de P.L. Courier*』（1829年）で、「軍人にとって、この時、帝政に対して《否》と答えること、それは徒に事を構えるだけだった。そもそもこの投票結果の開票をとりしきるのは誰か？ ボナパルトが、多数の《否》が自分に突きつけられた時、それを尊重すると誰が保証するのか？」とし、この時のクーリエの反応を、至極当然の事として受け取っている。

最後に、サント・ブーヴが、同じ場面をどう見たかを記しておこう。カレルより二十数年後の文章である。

「その頃クーリエが書き残したもので目立つのは、書簡である。その頃から彼は、手紙の中に、ひそかに、思う存分の辛味をまき散らしていた。中でも、彼が、ピアチェンツァ駐留のダントール連隊において、帝政宣言がどのように行なわれたかを述べた手紙は、有名である。それは最高度に才知の利いたパロディー、この上なく軽蔑的、また反抗的なパロディーだ。じっくり時間をかけて推敲したものではない。(c'est la plus spirituelle parodie, la plus méprisante et la plus frondeuse, et qui a dû être fort travaillée à loisir.)」(«Paul-Louis Courier», *Lundi 26 juillet 1852, Le Constitutionnel* 紙)】

(6) 任地への旅

『書簡集 1.』 [107] / 『プレイアード版全集』 (XXIX)

「皇帝か共和制か」、士官たちに対する意見聴取が行なわれてからほどなく、クーリエは、南イタリアで、砲兵隊の指揮を執るためピアチェンツァを離れるよう命じられる。当時の南イタリアには、形の上では旧来のナポリ王国が存続し、フランス軍と協力して、叛旗を翻す共和派と戦う建前になっていたが、実際にはフランス軍は、地中海の制海権を握っているイギリス軍、また、頑強な抵抗を続ける住民、「山賊」との戦いに悩まされていた。クーリエが送り込まれたのは、そのような状況の真ただ中である。

これまで持つことのなかった自分の持ち馬を買い揃えるなどの準備に、たっぷり時間をかけてから、ピアチェンツァを出発したのは、1804年9月14日、それから、11月5日、プーリア地方、アドリア海に面する Barletta の司令部に到着するまでの2ヶ月近い旅が始まる。

Michel Crouzet (前掲書) は、この旅を、「素晴らしい観光旅行、考古学の、博学の旅」と評したが、少なくとも、全日程の3分の2ほどで、「ナポリ王国最初の村ジュリアノーヴァ」に入るまで、これは、そのまま当てはまる言葉である。当時の道路状況で、馬を進める場合、一日どのくらい

の距離が適当だったのだろうか。クーリエは、70キロほどの距離を第一日目の行程とし、そこでまず2週間滞在、それ以後も、ほぼ50キロほどを一日の行程とし、随所にゆっくり滞在期間を入れている。

なるほど、ナポリ王国に入ってから、周囲の雰囲気も緊張度を増す。むろん、これまで、ピアチェンツァ駐留中にも、敵対する住民の潜在的反感を絶えず感じてはいたけれども、身に及ぶ危険度は今や比べ物にならない。自分は、あらゆる村民から、一瞬の隙を狙われているのだ。地中海を挟んだイベリア半島で、これから数年後、ナポレオン軍を悩ますことになるのと同じ状況が、ここではすでに生まれていたのである。guerilleroという言葉はまだ用いられていなかったが、その実態だけは、ここ南イタリアでは早くも充分に具わっていたのだ。そんな中でも、クーリエの筆によって浮かび上がるのは、優雅とさえ言えそうな旅の行程である。

(Saumur 在住の Lejeune 氏へ) / 第 XIII 年フロリアル 3 日 (1805 年 4 月 23 日), Barletta から

『拝啓 この部隊に配属されてから半年になりますが、この間、あなたからのお手紙ほど私を喜ばせた手紙は、他の誰からも受けとってはいません。近況を知らせて頂くたびに、大変喜んでいること、確信してください。

ピアチェンツァで、騎乗砲兵隊指揮のため、この地に向かえとの命令を受けた私は、見た目も美しい乗馬用の良馬を3頭買い求め、下僕を一人連れて、旅立ちました。途中パルマには、立派な図書館があって、2週間の滞在。クセノボンに関する調べものがあったのです。ドワイヤン Doyen の描いたヴィルジニー *la Virginie* も見ましたが、あまり頂けないこの繪を見て、昔デッサンの勉強をした頃を思い出しました。

パルマからモデナへ向かいましたが、途中のレッジョはきれいな町

で、詩人である旧友と再会しました。

次に向かったのはボローニャですが、ここは本当に美しい町です。イタリアのこの辺りはどこでもそうですが、雨がよく降る、それでいて、濡れずに町中を歩けます。どこに行っても、ちょうどパレロワヤルのように、通りに沿ってアーケードがついていて、便利であるばかりか、なんとも快適な展望を提供してくれます。二、三日そこに泊まって、碑文をコピーしてみたりしました。

ボローニャを出たのは10月4日で、アンコーナには11日に着きました。途中、ファーノ *Fano* とセニガッリア *Senigallia* では、大変に面白い碑文に出会ったのですが、全部を写すわけにはいきませんでした。秋も深まりかけていましたから、これ以上ぐずぐずすれば、この先アブルツィ山塊を抜ける際、あちこち激しい流れで足止めを喰う心配があったからです。』

クセノポンは、『アナバシス』で知られた、古代ギリシャの作家だが、クーリエは以前からその著作『騎兵指揮法／騎馬術』の翻訳を企てていた。それに関する文献があるというので、予めしかるべき紹介状をとりつけ、図書館を訪ねるが、それにしても最初の宿泊地で2週間の滞在とは、いかにも「クーリエらしい」。ただ、後に、この地に関係したひとつの事件が起きる。伝記作者も好んでとりあげる事件だから、簡単に触れておこう。

クーリエは、旅の伴侶として何冊かの書籍を持参していたが、荷物になるのを厭がって、図書館に預けておいた。それを後に、*Barletta* 到着後、自分のもとに送ってくれと頼んだのである。依頼を受けた館員が、念のためケースの中身を確認してみると、そこには一冊だけ、当図書館の印の押されたものが混じっていた。クーリエは否定したが、明らかに盗難未遂である。それにしても、図書館自体に送付を依頼するなどというのは、どこか間の抜けた話でもある（多少話題が逸れるが、興味を引くのは、伝記作者の *Gaschet* が、当時の戦時にあっては珍しくはなかった略奪行為、とりわけナポレ

オンが国家的事業として行なった、占領地からの美術品、工芸品の収奪になぞらえることによって、クーリエの行為を、なんとはなしに弁護していることである。

『ナポリ王国最初の村ジュリアノーヴァ *Giulianova* に着いたのは、10月19日でした。コルドリエ修道僧たちから、実に立派な食・住を提供されましたが、村には修道院の他に、到底人の住めそうな家はありません。私はその後、王国のどこでも同じ扱いを受けました。その土地土地で最高の家に宿り、可能な限り、まともな食を与えられたのです。王国中に山賊が、跋扈していますが、これは、政府の責任です。自国の民を苦しめ、その財産を好き勝手に奪いとるために、政府は彼らを利用しているのです。私もずいぶん、彼らに遭遇しましたが、当時は彼らも、フランス軍とことを構えるのを好まなかったので、黙って私を通しました。想像がつくでしょうか、この国では、どこに行くにも、車で町を離れる場合、50人の武装集団を護衛に連れていかなくてはなりません。もっとも、この集団自体が、守るべき旅行者の、身ぐるみを剥ぐことも珍しくはないのですが。長い間、彼らは私たちを見逃してきました。でも、ここ1、2ヶ月前からは、孤立した兵士ばかりではなく、小部隊までが攻撃されるようになりました。

20日、ペスカラ *Pescara* 到着。劣悪な要塞設備にも拘わらず、ナポリ王国最強の町として通っている所です。町中どこでもそうですが、私が宿舎として当てがわれた家も、5年前、フランス軍が撤退した後、ルッフォ *Ruffo* 枢機卿一味の山賊の略奪を受けていました。その際、ひときわ目覚ましい働きを見せた山賊たちが、その後、政府に重用され、とりわけ税の取り立てのために、雇われているのです。「このやくざ野郎」と罵られるのは王党派、地主はおしなべて「ジャコバン野郎」、これがこの国の罵り言葉です。』

ルッフォ枢機卿とは、1799年2月にシチリア島からやってきて、カラ

ブリア地方のフランス軍、また共和主義者たちに対して、住民、山賊たちを指導、蜂起させたサンフェディスト（教権主義者）のリーダーである。

『オルトーナ Ortona で宿を借りたベラルディー伯爵の語る所
では、州総督はカルボーネという名前、始めは石工、次いでガレー船
漕役囚、それから仏軍撤退時には王の友だち、今ではこの地方の総督
として、絶対権力者。このカルボーネが、私の着くほんの数日前に、1
万2千ドゥカート、つまり5万フランほどですが、払えと命じてきた
そうです。伯爵は、半額で話しをつけたそうです。これがこの国の政
治。すべては王妃のさしがねで、彼女は、自身が統治する国民に対す
る憎しみと軽蔑を公言しています。』

当時の王妃は、ハプスブルク家出身のマリア・カロリーナで、とりわけ
最愛の妹マリー・アントワネットが犠牲になってからは、ナポリ王国での
共和派弾圧の中心となっていた。

『ランチャーノで私は、フランス軍猟騎兵の一連隊と出会いました
が、士官のひとりが、10ルイで売ると言うピストル一対を買い求め
ました。手許の武器をふやしておくのが得策と考えたのです。連隊長
は、ヴァストに行くための道案内をひとりつけてくれました。ところが
道案内はかえって私を道に迷わせ、そのためとある村で、危うく我々、
命を落とすところでした。ミサから出てきた百姓たちが、司祭に焚き
付けられたのでしょうか、我々の命を神様に捧げようとしたのです。
私には彼らの言葉がわかったので、馬から降りなかったのが幸いでし
た。』

「私を道に迷わせた」のは故意か否かは *m'égara* という表現だけでは、
わからない。

『ヴァストで軽歩兵の小分隊と出会い、私もいっしょに、テルモリまで進みました。ここでも、町で一番立派な家に宿舎を当てがわれたのですが、真夜中、賤民たち *la populace* がやって来て、私を寢床から引きずり出しましたが、それと同時に、寝ていた部屋ばかりではなく、邸中が、てんでに武器を持ったならずものたち *la canaille* で、いっばいになりました。彼らは、ひとりの男を私の方に突き出して、兵隊がこの男のマントを盗んだと言うのです。私は彼らに、どの兵隊が盗んだのか、わかっているのかと尋ねました。「わかっている、どこの家に泊まっているかも」と答えるので、そこまで私を連れて行くように言いました。喧噪の中をその家まで着くと、泥酔した兵隊がいて、こいつが泥棒だという話しです。この兵隊が盗みを働いた痕跡はどこにも見あたらないので、私は、この騒ぎは町の住民が、我々に喧嘩を売ろうとしている口実に過ぎないと考えました。ただ、私の7、8人の仲間は、それぞれが当てがわれた家に寝ていますから、住民たちに逆らうことは難しそうでした。私は、喚き散らす男たちに、他に盗人に心当たりがあると言い、分隊の曹長と伍長が泊まっている家まで連れていってくれと頼みました。そこまで行くと私は、二人を起こし、彼らに武器をとらせましたが、終始まるで彼らを脅しているかのような素振りをし続けました。実際には、なんとか部下を集合させるよう命じたのです。真向かいの家に宿っていた二人の兵士が、出てきて我々に合流しました。その間私は、「ジャコバンは殺せ!」と喚き続ける男たちをなだめ続けたのですが、次第に我々の方も力を盛り返し始めていました。やがて我々は、さらに別の二人の兵士が宿っている家に行きましたが、そのうちの一人に私は、例の泥酔した兵士が、事実マントを盗んだこと、そのマントを彼はどこかに隠したはずだということを教えられました。我々が酔った兵士のところに戻ってみると、彼は盗んだマントの上で寝ていました。「はじめはマントが見当たらな

かったのは、その家の主が、はじめに泥棒をした兵士から盗んでおきながら、家捜しされるのが心配になって、眠りこけている泥棒兵士の体の下につこんでおいたのではないか」、これが我々の推理でした。こんな風に事件が終わらなかったなら、やむなく力に頼ることになったでしょうが、その場合我々の方が不利だったでしょう。

すでに触れたヴァストは、オリーヴの森の中にあり、いっばし、風光明媚な場所でした。私の宿は、「神の母 *la Madre di Dio*」修道会の神父たちの家。近隣の町すべてをひっくるめた地主は、フランソワ

I 世をバヴィアで捕虜にした、その名も高きデル・ヴァスト侯爵(我が国の歴史家たちの間では、デュ・グアストゥ *du Guast*) の末裔です。

テルモリ *Termoli* で海岸線から離れ、31 日には、内陸の、小さな美しい町セツラカプリオーラまで来ました。そこでは、馬たちを、私といっしょに泊めることが断われたので、少々荒っぽい手でしたが、それなら厩舎の入り口をぶち壊すぞと脅してやりました。しかし私は、そんな言い方で最後まで押し通せるほどには強くありませんでした。私を迎えた邸の主人は、いかにも勢力家然とした男でしたが、こんな風に私に言ったのです。「あたしのところには、完全武装のアルバニア人が、50 人ばかりいる。喧嘩を売るのは、やめた方がお得でしょう。」事実、その家では、アルバニア人たちが用心棒として雇われていました。彼らは、短剣を腰にぶら下げたまま私に給仕し、友人同士であるかのように、話しかけてきました。出発に際しては、主人から、彼らの一部を護衛につけようかとも言われました。私は、申し出を断りました。彼らの言うところでは、日当 6 カルリーノ、フランスのほぼ 55 スー相当で、雇われているとのことでした。

そこから私はサン・セヴェロ *San Severo* まで行き、続いてフォッジャ *Foggia* まで行きました。プーリアの平地で冬を過ごすためにアクイラの山地から降りてきた 10 万匹を越す羊の群れの中を歩きま

した。羊飼いたちとも話しましたが、彼らは一種の未開人と言っているでしょう。山羊の大集団も見られました。こうしたすべてが、国王の財産です。

私はチェリニョラまで来ました。そこは、コルドバのゴンツァロ *Gonzalo de Córdoba* によるかの有名な戦いが行なわれたところです。バヤールが、たった一人でスペイン軍の攻撃から守った橋も渡りました。長い橋ですが、狭くて、車2台、並んでは通れません。

とうとうバルレッタに到着、司令部に合流しました。人口2万の都会で、家もそこそこ建っていますが、遊歩道、並木道といったものはない、乾燥した平地です。近在に村とか、別荘といったものは、いっさいありませんが、これは、山賊たちが跋扈しているため、田舎での生活が不可能になっているからです。土地が耕されているのは、それぞれの町のごく周辺だけ、地味は肥えていて、ほとんど手を加えずとも豊かに麦が育つため、オリーブ・オイルともども、商取引の対象となるのですが、絶えず海賊ばかりか、政府の側からも強奪されています。ここはほんらい港なのですが、魚は手に入りません。海岸線にまで降りてきた山賊たちに、漁師がみんな連れ去られてしまったからです。

以上が、私の旅の記録です。現在の私の立場は、はなはだ快適で、砲兵隊司令部の長という職責が、私にある種の特権を与えてさえいます。この方面の軍全体をとりしきっているサン・シール将軍との折り合いもよく、ピアチェンツァでは、ジュルダン元帥手ずから私に勲章を授けてくれました。

ロシアが、我らの皇帝陛下に宣戦を布告したと聞きました。もしそうであるならば、最初の戦火はこの辺りでしょう、目の前のコルフ島には、2万のロシア軍がいますから。戦争になれば、私は、砲撃を指揮する資格を持った唯一人の上級将校として、極めて有利な立場に置

かれることになるでしょう。』

ロシアが、第三次対仏同盟 (1805年4月) に加わった当時、コルフ島 (=ケルキラ島) は、ロシア・トルコの保護領だった。「甚だ有利な立場に置かれる」とはつまり、「一番身を危険にさらす」ということだろうか。

『それにしても、4ページも書いてきて、いっこうあなたのお手紙への返事にはなっていないですね。あい変わらずのご健康はすばらしいこと、そのためいつでも私はあなたを幸せな人と考えてきました。私の健康状態も、悪くはありません。この国と、ここでの私の生活スタイルが、私にはびたり合うようです。昔からの研究も、やめたわけはありません。数人の学者先生との文通は続け、碑文を送ったりしています。お住まいを変えられたようですね。今お住まいのソミュール *Saumur* という土地は悪くない、でも、私がそこに定住することはないでしょう。私は今や、イタリア人になりました。もしイタリア王国ができるなら、そこに定住するのが私にとって、一番の得策になるでしょう。と言っても、具体的な計画を立てているわけではありません。運任せ、なんの野心もありません。

フィロニエールの土地を売るように、せつつかれています。でも私としては、代わりにどこかを買う時にしか、売るつもりはありません。もし、誰でもがするようにするというのであれば、ここで年、1万フランは貯めねばなりません。資産は、すっかり放ったらかしのままです。

司令官殿が、イタリア王の戴冠式には、私をミラノに連れて行くと約束してくれました。しかし、どう考えても、司令官殿自身、そこには行けません。我々は、四方八方脅威にさらされています。上陸要員を乗せてイギリスを出航したイギリス艦隊も、目的としているのはこの辺りかもしれません。そうなれば、ロシア軍と結んで、我々を手

こずらせることでしょう。地元の山賊たちも、はなはだ厄介。辺り一帯で蔓延している流行病も気がかりです。そんなこんなと、いろいろあるにも拘わらず、近々私は、フランス軍の配備されている要塞都市全域の視察に出かけることになっています。プリンディジ、ターラント、ガリポリ、オトランタ、レッチェ等々です。ごく最近、私は、カノーザ *Canosa* に行ってきました。そこでは、巨大な都市がまるまる一つ、廃墟になっているのです。どこを掘っても、みごとな遺跡が姿を見せません。ですから、発掘は禁止されています。保存の行き届いた壺といっしょに、古いエトルリア人の墓も出てきました。すべて、興味深いものばかりです。

もう一度、あらためて、さようなら。 *Adieu encore une fois ; je vous embrasse.*

クーリエ ナポリ派遣軍 砲兵司令部 参謀長』

この手紙の宛名人、François Lejeune (1735-1830) は、クーリエの父親が法律を学んでいた頃 (1755-56) の友人である。その後、クーリエ家との親しいつきあいが長く続き、1794年6月からは、ツーレーヌのクーリエ家に住み込み、父の死後にも近くに居を移し、母クーリエ夫人を看取りさせた。その後、ツールから見てロワール川下流の町 Saumur に移住する。G.V.L.D. 編纂の書簡集の第一巻巻頭には、90歳の Lejeune が、記憶を頼りにクーリエの生涯を辿った文章が載っている。我々が今読んだこの長い手紙には、年老いた父親に、近況を知らせる息子の口調が、時に感じられるのは、そうした二人の関係から来ているのだろう。

(7) 長靴の底で

『書簡集1.』 [132] / 『プレイアード版全集』 (XXXVII)

バルレッタ着任の翌年、北部イタリアでオーストリア軍が勢を盛り返し

たため、クーリエもいったん Veneto 州に呼び戻されるが、1806年2月には、マッセナ将軍によって占領されたナポリに入る。アウステルリッツの戦いで勝利を収めた(1805年12月2日)ナポレオンが、ナポリ王国に対して、本腰を入れて立ち向かい始めたのである。ナポリそのものは平定されたとは言え、より奥地では、ナポリ軍の残党が、住民、山賊、またイギリス軍といっしょになって、抵抗を続けている。クーリエは、自ら奥地へ赴くことを志願して、3月末に、イタリア半島の南の突端、メッシーナ海峡に臨むレッジョ・ディ・カラブリアの町に着く。ナポレオンが、フェルディナンド4世を放逐して、自分の兄、ジョゼフ・ボナパルトを王位に就ける直前のことである。なお、発信場所と日付は、「Lago Reggio」とあるが、「Reggio di Calabria」と同じことなのだろうか？

(**夫人へ) / 1806年4月(15日)ラーゴ レッジョから 『ほんのつまらない私のような男のこと、奥様が少しでも憶えてくださるとしたならば、私が、カラブリアのレッジョで、つまりはイタリアの果ての果て、パリからも奥様からもこれまでで一番遠く離れた場所で生き続けているとお聞きになっても、不愉快には思われまいとあえて想像いたします。奥様にお手紙差し上げようと思い始めてから半年の間、足りないのはゆったりとした憩いの時間、お話ししたい材料には事欠きませんでした。と申しますのも、我が軍は、電光石火の勝利また勝利、大地の尽きるこの地に到るまで、立ち止まる暇とてなかったのです。王国一つの征服としては、かなりの早業、と言えないこともないでしょう。奥様にも、ご満足頂けたものと想像いたします。唯この私にはこれでは足りない、と申しますのは、シチリア島をつけ加えない限り、イタリア全土を手に入れたとしても、私にとっては無に等しいのです。こんなことを申し上げるのは、征服者としての私の気力を少しでも奮い立たせるためなので、実を申せば私には、シチリア

がその税金を、(ナポレオン皇帝によって押しつけられたナポリ王) *Joseph* に払おうと、(王座を追われた) *Ferdinand* に納めようと、どうでもいいのです。その点については、好き勝手に島を歩き回って差し支えなしという条件さえあれば、どうとでも話し合いに応じようというものなのです。それなのに、これほど近くまで来ていながら、足を踏み入れることができないなんて、これこそ憤懣やる方なしではございませんか？ 事実、奥様の目には、チュイルリー宮殿からフォブール・サン・ジェルマン境界が見えると同じに、我々には島が見えるのです。まったくもって、海峡と言っても、それ以上の距離はない。それなのに、渡りかねているとは、そんなこと信じられましょか？ 我々に欠けているのは風だけだというのであれば、おやすいご用、アガメムノンを見做って、娘 *fille* をひとり犠牲に供しましょう。ありがたいことに、あり余るほどおりますから。ただ、小舟一艘ない、それが悩みの種なのです。船なら今に来る、という話しがあります。この期待がある限り、奥様、私が後を振り返るとは、奥様が住まわれている場所の方に、どんなにそこが私にとって魅惑的だろうとも、視線を向けるとは、夢、考えないで頂きたい。私が見たいのは、プロセルピナの祖国、それからどうして冥府の王は、この国の女を娶ったのか、わずかな知識でも得たいのです。シラクーザかパリかとなれば、奥様、私には、躊躇うところはありません。物見高い野次馬に過ぎない私ではあっても、(パリの名所) フォンテーヌ・デ・ジノサンよりも、シラクーザにあるアレトゥーザの泉を私は断然選びます。』

ギリシャ軍の船団を率いて、トロイアへ攻め込もうとしているアガメムノンは、女神アルテミスの怒りに触れ、船出に必要な風を止められてしまった。やがて女神の怒りを解くためには、娘イピゲネイアを、犠牲に供しなければならぬことを知る。また、アレトゥーザの泉は、シラクーザの旧市街で噴き出ている。海の直ぐ近くでありながら、真水としての水質

を保っている。ギリシャ神話のニンフのおかげだ。

『そうは言っても、我々の奪い取ったこの王国も、そんなに捨てたものではありません。どころか、まるで散歩しながらの征服としては最良のものと、断言できます。とりわけ私が感服するのは、我々のために、すすんでそれを手放してくれた人々の好意です。もし彼らが、祖国防衛を思いついていたならば、一も二もなく、そんな国は、そのまま放っておいたことでしょう。我々は、誰を相手にするにせよ、暴力を振いにやって来たわけではないのですから。今この瞬間、一人の指揮官が、ガエタの町を手放すまいと踏ん張っています。大いに結構、守ればいいでしょう。もしカプアの町が同じことをしていれば、今頃フランス軍は、パンも大砲もなく、あい変わらず城門を前に、攻めあぐねていることでしょう。現今欧州全土が、我々をはなはだ丁重に遇していると言わねばなりません。ドイツでは、軍隊は武器を、総督たちは市の鍵を、差し出してくる。なんとも嬉しい善意の表れ、これこそ、征服を飯の種とするものたちを勇気づけるもの、そういうことでもなければ、このような職業なんか、誰だって、さっさと捨ててしまふことでしょう。

というわけで、我々は今、長靴の一番奥にきています。世界で一番美しい国、それに、熱病と反乱さえなければ、まあ、平穏無事と言えるのですが。と申しますのも、民衆どものなんと生意気なこと！ 礼を知らぬ百姓どもが、欧州の覇者に襲いかかってくるのです。彼らは我々を捕まえると、できうる限りのとろ火で我々を焼こうとします。でも、そんなことを、どうこう言う人間はいません、捕まる人間が悪いのですから。誰もが、お宝の一杯入った荷車、もしくは、荷物を積んだラバだけは、命といっしょに助けたいと願っています。あとはどうなってもかまわないのです。

ところでこの国の美しさときたら... 少なくとも私の目には、都会はどうということもありません、しかし田舎ときたら、どう言えば、想像して頂けるかもわかりません。奥様が、これまでご覧になったなものにも似ていないはずです。オレンジ畑、レモンの生け垣は脇に置きましょう。それでも他に無数の木が、見知らぬ植物が、力強い地面に、無数に生い茂っています。我々のところと同じ植物にしても、ひとまわり大きく、より強靱に育っていますから、まったく別の風景です。

どれもこれも頂きに冠のようにミルトやアロエが伸びている岩や、谷間のシュロを眺めていると、ガンジス川やナイル川のほりにいるような気になってきます、ピラミッドや象の姿が見えるわけではないのですが。それでも、代わりにいる水牛が、これまた別世界の肌色をした住民ともども、アフリカ大陸の植生の中で、みごとな調和を保っています。実を言えば、今ではもう、町の外で住民の姿を見ることはほとんどありません。ですから、この美しい風景からも人影は消え失せてしまいました。ただ想像するより方法がありません、こうした自然が、耕作者の労働、笑い声によって生き生きと息づいていた頃の光景を思い描くには。

現今、同じ場所で展開されているシーンのスケッチを一つお見せしましょうか。どこかの丘の傾斜面、さっき私が述べたように飾られた岩に沿い、我が軍の兵士たち百人ほどの一隊が、隊列を組むこともなく進んでいる。目的もない進軍、何の心配もない。用心する？ 警戒する？ 何のため？ ここ一週間以上の間、この地域で、我が方の部隊が襲われ、皆殺しになったなどという話しは聞かない。丘の麓に、流れの速い細流があって、もう一つ先の丘への登り口に入るには、越さねばならない。列の一部は、早くも水の中、一部はこちら、と思う間もなく、もう向う。とつぜん、四方から、千人ほどの農民、山賊、

鎖を外された徒刑囚，脱走兵らが完全武装で襲ってくる。指揮官は，どこかの副助祭，どいつもこいつも，射撃の名手，姿を見せるより早く，こちらに向かって撃ってきます。我が方で，まずやられるのは，将校たち。運がいいのは，その場で即死。そうでないのは，それから数日間，処刑人の玩具となります。

さてそうこうするうちに他方では，総指揮官，大佐でもなんでも，階級なんかどうでもいい，何も考えずに，たいていの場合は通過地点が安全かどうか知らずに，この部隊に出動を命じたお偉方が，部隊全滅の報を受け，近隣の村々をその下手人と考える。直属副官の一人に，500人の兵卒をつけて向かわせる。略奪，強姦，虐殺... その結果，死を免れた者たちが，副助祭率いる一味を膨らませることになります。

この上また，奥様は，陣営にいるこの指揮官が，何をして時間を送っているのか，お尋ねでしょうか？ 若ければ女探し，年寄りならば，金集めです。両方に，血道を上げる場合もよくある。戦争っていうのは，そういうことのためにしかないのですから。でも，若いにせよ年寄りにせよ，遠からず熱病にかかります。そうなれば，三日ともたずに，女たちと金の間に挟まれて，あの世への旅立ち。祝杯をあげる者もいなくはない，悲しむ者は一人もいない，あつという間にみんなが忘れる。そして後継者も，同じことを繰り返すのです。

奥様がおられるところでは，我々が殺し合っているかどうかなど，あまりお考えになることもないでしょう。他に沢山のお仕事があり，おありですから。銀の相場，株価の変動，破産の脅威，ブイヨットゲームでの賭け (*la bouillotte*)。いやまったく，あなた方のパリも，それはそれで，物騒な修羅場，あなた方も，我々よりさして立派というわけではない。

でも，人類全体を，あまり嫌ってはいけませんね，確かに厭うべき

存在ではあるけれど。それにしても、奥様、奥様のような人々を少数選んで箱船に乗せ、残りは全員もう一度溺らせることができるなら、これは、ためになる大仕事と言えましょう。その時私はどう考えたって、水没組。でも奥様はその時、私に手を差し伸べてくださいますよね、でなければ、せめて、あなたのショールの（この言葉、間違っていますか？）端っこの方だけでも。ご存知の通り、私はいつも、生涯永遠に、奥様の...』

『皇帝陛下を作る』と同様、『書簡百選』の一つであり、かつ、「1825年版」もある手紙で、クーリエが重要視していた手紙の一つだ。ここでも宛名は書かれていない。ただ、クーリエ夫人の筆跡で、欄外に「Lariboisière 夫人宛」とある。もしそうだとすれば、この手紙は、特別な意味を持ってくる。なぜなら、夫 Lariboisière 将軍 (1759-1812) とは、アウステルリッツの戦いなどで数々の武勲をたてた人物で、ここで述べられているような戦争観とは、まさに対蹠的な考え方をしていたに違いないからである。クーリエは、軍人になりたての頃参加したマインツ攻城で近づきになり、さらに、これはこの手紙よりも3年ほど後の話しになるが、軍人として最後の戦場を通して関係する人物である。こうした人物の身边に、あえて、すべての戦争の価値を否定するような文面を送ったのは何故だろう。

(8) 百害あって一利のない宮廷

『書簡集1.』[135] / 『プレイヤーード版全集』(XXXVIII)

クーリエの駐留するレッジョ・ディ・カラブリアとその周辺の海岸一帯を、堅固な要塞とするため、司令官 Reynier 将軍は、ターラントへ行って大砲を持ってくるというミッションを、クーリエに託する。途中、海路で激しい嵐に遭いながらターラントに着いたクーリエは、直ちに大砲積み出しの作業に取りかかるが、視察旅行途中その地へ立ち寄ったジョゼフ新

国王のために（1806年5月3日到着）、すっかり邪魔されてしまう。すべての関係者が、仕事を放り出して、国王の寵愛を受けようとしたからである。この時の宮廷体験、すぐ近くからの観察が、後のクーリエによる激しい宮廷批判に、大きな影響を与えたとは考えられることだ。

（Dulauroy 将軍宛 在ナポリ / 1806年5月28日）ターラント発

『将軍閣下に申し上げますが、国王陛下が口出しさえしなければ、3週間前に、国王陛下の命令は実施されていたはずです。陛下の巡幸が、私の作業実施最中に行なわれたため、大幅の支障をきたし、すべてが狂ってしまいました。ターラントの男たちをひとかどの働き手に仕立て上げ、おかげで、一週間というもの、思い通りにことが運んでおりました。こちらの希望を向うから察し、港でも、武器庫でも、まるで徒刑囚のように働いてくれていたのです。それがどうでしょう、王が現れるや否や、みんなの気持は、王の手に口づけすること、一度した人間はもう一度することだけ。市長も助役も、町の労働者も、港の、武器庫の労働者も、一人残らず国王拝謁のため、待合室か階段にへばりつき、私の手では、なんとしても引き剥がすことができない。陛下がここに滞在している間中、このありさまでした。こんな場合こそ、王権の象徴たる笏の良き使い道がある、レッカツアンパ（leccazampa = 足舐め/へつらい）愛好者全員の鼻っつらをぶちのめしてやるのがいい。ところがこれは考え違い、私を除く全員が、この愚行を楽しんでいたのです。私がいくら喚いても、罵っても、嘆いても無駄なこと、「手への口づけ」の愚かしさは群を抜き、カラブリア圏内にある全陣地と海岸線全域を要塞化しようという、これまた愚の骨頂をすら、圧倒していたのです。

国王も漸く立ち去って、私はこれで、宮廷の幼稚さ、煩わしさも終わりかと思いました。しかしことはそう簡単には片付きませんでした。

王一同はここを去るに当たって、私を手も足も出ない状態に置いたまま、行ってしまったのです。つまりこうです。ご存知の通り、私には1スーの貯えもなく、すべて必要なものは、徴発によって力づくで求めてこなければならぬのです。それがどうでしょう、いっさいの徴発行為が禁じられました。かまわず私は、今日あらためて、20対のラバ、ウシ、水牛を提供させました。私のために、すべての輸送作業を行ってくれる動物たちです、よほど確かな保証がない限り、もとの持ち主に返すつもりはありません。私は告発されることでしょう。でも、私には将軍閣下の後楯がある。閣下は、私が、王の欲することを、軍が救われるために大切なことを、王の意志に背きながらも実行したことをおわかりです。ですから、私がまるで罪人ででもあるかのように猛獣の穴に投げ込まれるのを、放っておかれることはないでしょう。』

『中略』(国王付き副官が、命令系統を飛び越えて、勝手にクーリエに対して命令しようとした。)

『この仕事を「スピーディーに行なう」ために、一月前からなにもそれほどの配慮は必要ありませんでした。王はただ、ポケットに手を入れて、ぼんやり立っていればよかったです。王を取り巻く宮廷も退いて、私に好きなようにさせてくれれば、それでよかったです。』

閣下、私は閣下を当てにしております、もろもろの状況が、私にとって不利に傾くのを防いで頂きたいのです。私には、軍務の遂行以外のもくろみなどなかったことは、閣下もご存知の通りです。私の忍耐力は、苦しい試練に立たされております。

ここだけの話しです、軍隊にあっては、企画はなにひとつ実行されず、秘密は洩れ、命令に耳を貸す人間はおりません。

(対岸の敵地)メッシーナでは、私のレッジョからの移動とその目的が、私が歩き出す以前から知られていたと、確信します。これは、断

言できることです。私は深夜 12 時に王に拝謁、明け方出発しました。摩訶不思議！ 誰ひとり知らないはずなのに... 私に宿を貸していた邸の主人に別れを告げ、馬に跨がると、主人が言うのです、「大砲をとりたてにターラントまでお出かけですよ。」 私は、危うく馬から落ちるところ、出発もとりやめるところでした。それが最上の策だったでしょう。なぜなら、私の行動には二つの指針の実行が要求されていたからです。秘密と迅速です。第一がまず破られたのですから、第二も明らかに... そうです、私には、「手の口づけ」の秘技が見抜けなかったのです。

私は、神が我々の側に立っていること、皇帝陛下の天才をもってすれば、我々はいつどこでも、たとえどのような過ちを犯そうと、勝者でいられることを知っています。それにしても、多少の良識、秩序、先見の明があっても、悪いことではないと思うのですが。

閣下からの美しい、ご厚情に満ちたお葉書頂きました。それへの、お返事は今はいたしません。なんとも、不愉快な気分を、抑えられないからです。明日に延ばさせていただきます。それはそれとして、信頼なさってもけっこうです、お望みの一件は、悪い方には行っておりません。閣下の言葉に耳を傾けているようですから。「耳を貸す女は、遠からず、他のものも貸す」と言います。

ようやく大砲運搬の手筈が整い、数隻の船に積み込んで送り出した後、クーリエも 12 門の大砲を積んだ船で出発する。翌朝彼の船は、英船の追跡を受け、彼は脱出するが、大砲はすべて奪われてしまう。命令者の Reynier 将軍からこの事態の責任を問われ、ひどくなじられたクーリエは、怒りを爆発させて、「12 門の拿捕だけですんだのは、誰のお蔭だと思うのか。あなたたちの愚かさにもめげず、この私が頑張らなかつたなら、すべてが奪われていたはずだ」と言って、激しくやり返す（1806 年 6 月 22 日

Monteleone=今日では Vibo Valentia から友人の一士官宛 [137] (XLI)。クーリエが一部始終を告げ、訴える相手の Dulauloy 将軍 (1764-1832) は、フランス国内、ジェノヴァなどでの勤務の後、目下は在ナポリ、ジョゼフ王直属。後には、帝政伯爵、また、ナポレオン皇帝の侍従となる。

(9) 敵軍礼賛 / 古代を生きる

『書簡集1.』 [146] / 『プレイアード版全集』 (XLVIII)

手紙の宛先の Guilhem de Sainte-Croix 男爵 (1746-1809) は、軍人の家系の出身で、10代終わり頃から数年間、擲弾兵連隊に所属していたが、その後軍職をはなれ、『アレキサンダー大王の歴史書批判研究』(1775)などを著した。革命が勃発すると(1789)、貴族という身分のために、身柄を拘束されるが脱出に成功、平穏が戻ると、新聞、雑誌に執筆、研究活動を再開する。クーリエは、前々から準備していた、クセノポン『騎馬隊指揮法/乗馬術』の原文校訂版及び翻訳の印刷、出版にさいして、すべてにおいて世話になる予定だった。de Sainte-Croix の病気のため、それは実現しなかったが、二人の間柄は親密で、他にも何通かの手紙が残されている。

冒頭に記されている英軍勝利の戦いは、「サンタ・エウフェミア Santa-Eufemia の戦い」(フランスでは、「マイダ Maida の戦い」と呼ばれているものである。G.V.L.D.によれば、実際には、英軍の勝利も長くは続かなかった。上陸したサンタ・エウフェミア湾の浜辺の悪条件が、兵士の健康を急速に損ね、2,000人の兵士を失い、部隊は早々にシチリア島への退却を余儀なくされたからである。(『書簡集1』p. 255)

クーリエ自身が、直接この戦いに参加したわけではない。この時クーリエは、再度の命令に従ってターラントに向かっている途中で、仏軍敗北の知らせを受けて進路を変え、退却した部隊と Matera で合流している。

de Sainte-Croix 氏へ / 1806年10月2日, Mileto から 『拝啓 (Monsieur), 前回差し上げたお手紙に, ご親切なご返事頂きましたが, それ以後当地では, 大変な事件が続いております。もっとも, 騒いでいるのは我々だけで, そちらでは, さしたる話題にもなっていないかもしれません。いずれにしても, もし我々の災難をお知り *casus cognoscere nostros* になりたいなら, 新聞雑誌には頼らずに, これから私が述べることを信じて頂きたい。それは, ここ3ヶ月の間の, 大ギリシャ (訳注: マグナ・グラエキア=イタリア南部) での出来事です。

イギリス軍が我が軍を, 完膚なきまでに叩いたのです, それもごくごくわずかな代償を支払っただけで。と申しますのも, 彼らの側には, 50人と犠牲者が出なかったはずですから。7月4日のことでした。戦闘は10分間続いただけ, そしてこの10分で我々は, 我が兵力の3分の1 (約2,000人) を, 大砲を, 携行荷物を, 兵器弾薬を, 軍財政を, 行政施設を, 要するに, 失えるものすべてを失ったのです。かくして, カラブリア全土が立ち上がり, 愚かにも我々が彼らの手に残したままにしておいた武器を, 我らに向けてきました。その後の30日間に及ぶ撤退行動, 真夏の酷暑に焼かれた浜辺, すぐれた武器を持ち, 射撃にたけた獐猛なる山人たちの群れ, 我々の苦しみは, 想像を絶したものでした。白刃によって辛うじて身を護り, 撃ち合いによって僅かな泥水を奪い合い, 10歩離れた向うでは, 負傷兵が, 病人が, 眠気, 疲労, 栄養不足のため行軍に遅れた者すべてが, 殺されるのを見ながらの退却でした。弾薬も底をつき始めていましたから, それだけでも容易に予見できました, このままの状態では, 農民たちを追い返すことができなくなれば, 我々全員が命を落とすはめになることは。とうとう, 我が軍の兵士たちが反乱を起こし, 将校たちに向かって発砲しました。生存の唯一の手段だった略奪の習慣が, すべての軍規を打ち壊していたのです。

レニエ將軍の人となりは認めなくてはなりません。そんな状況でも、將軍の毅然たる態度は、一時たりとも揺るぎませんでしたから。將軍の姿を見ている限りでは、なんら特別な事態が起きているとは思えないのです。どんなひどい知らせでも、まるで、夕食の準備ができましたと告げられてでもいるかのように、聞いていました。將軍はまさに、ストア派の学者たちが、逆境の中での彼らの賢者に関して記していることすべてを、地で行なっていたのです。もっとも、こうしたなものにも犯されることのない沈着冷静が、如何に感嘆すべきものであったとしても、リーダーにあっては、それだけでは足りません。リーダーたる者、目指すところは、己の勇気を示すことよりも、勇気を吹き込むことでなくてはなりません。ラシーヌが実にうまく言っているように、自ずと他人に伝播し、「運命をむりにでも変える」勇気というものがあるのです(訳注: Racine Iphigénie IV 幕, vi 場)。もし、マルクス・アウレリウスとユリアヌスが、歴史の語る通りの良き指導者であったとするならば、彼らもまた、彼らの「ataraxie / aorgerie (冷静沈着)」を、しばらく脇に置いておく必要に、しばしば迫られたはずです。』

この戦いのフランス軍総指揮官だった **Reynier** 將軍は、すでに見た通り、クーリエと激しくやり合った仲である(8)でふれた、[137] (XLI)。それにも拘わらず、クーリエは一定の評価を彼に与えている、全面的賞讃ではないが。

『我々の置かれた立ち場は、悲痛なものでした。もうこれ以上はほとんど進めないという事態にまで、たち到了たのですから。その時、ガエタの町の包囲からやって来た、マッセナの部隊に出会いました。そこで我々は、この小部隊の前衛となって、もと来た道を引き返し、新たな部隊を後楯にして、反乱者たちに向かい、世にも卑劣な戦いを

仕掛けたのです。それでも、相手の死者は少数、捕虜になったのは、それよりさらに少数でした。それというのも、土地の佇まいや、その土地に対する彼らの知識、習慣のために、彼らはたとえ不意をつかれても、我々の手から簡単に逃れてしまえるのです。我々の方は、そうはいきません。我々の方で捕まえたのは、木にかけて吊します。向うが我々を捕まえれば、でき得る限りのとろ火で、我々は焼き殺されます。』

クーリエの所属する部隊の援軍としてやってきた Masséna 元帥の部隊は、道々略奪を恣にしたが、中でも残虐な行為として記録に残るのは、一村をことごとく焼き払った「ラウリアの虐殺」(1806年8月7~9日)だろう。「世にも卑劣な戦い *la plus vilaine de toutes les guerres*」とあるのは、とりわけそうした事件を指しているのいるのかもしれない。

『今こうして手紙を書いている私も、彼らの手に落ちました。そして、私のためにしつらえられた火刑台から逃れるためには、いくつもの奇跡が必要でした。今回の戦争を通じて、私は何度も命拾いしたのです。つまりこうです、戦いの度ごとに、私の回りにもそれなりの砲弾が降ってきましたが、その他にも私は、レッジョからターラントへの旅を、2度こなしたのです。つまり、500里近い道程を、時には徒歩で、時には馬で、時には四つん這いで、折にふれては尻餅をついたまま滑り降りたり、山頂から転げるようにして飛び降りたり、詩人 *Ibycus* がこの土地で遭遇したと同じ運命に (紀元前6世紀のギリシャの詩人、森の中で山賊に殺されたと言われる)、絶えず脅かされながらです。私が、山賊たちの手に落ちたのも、こうした行軍の最中でした。(*Di meliora piis*. 神々よ! 汝らを信じる者に、より良き運命を!) 拳句の果てに、カラブリア全土を通じて、私がかく小数の部下を連れただけで、いえ、時にはたった一人で、通り抜けたことのない森、断崖、難所は

なくなったほどです。

ある日など、私に従っていた7人の兵士のうち4人までが、5頭の馬もろとも、山人たちに殺されました。こんな風にして我々は、これまでも、毎日のように、数多くの将校を、分隊を失ってきたし、そして今もなお、失っているのです。

また別のある時、そのような衝突を避けようと、私はとある小舟に乗り込んで、悪天候にも拘わらず、船長を脅すようにして出港させたのですが、結果は嵐で沖合に連れ出され、それでも、なんと幸運なことに、オトランドの海岸に放り出されたのです。そこは、目的地から、60里ばかりのところでした。

また別の時、別の小舟に乗り込んだ私は、英海軍のフリゲート艦の砲火を浴びました。何発かをこちらの船目がけて、撃ち込んできたのです。船乗りたちは、全員海に飛び込んで、岸辺に辿り着きました。同じことのできない私は、ただ一人、まるでオデッセウスのように、居残ったのですが、こんな私の喩えは、これがカリブド海峡での出来事であっただけに、適切なものでした。目の前には、今なおシッラと呼ばれる小さな町が見えています。そして、どこぞの神が、そこまで無事私を送り届けてくれたのです。私はサーベルで、小さな三角帆をつなぎ止めていたロープを切断したのですが、そうとでもしなければ、舟もろとも、海底の藻くずと消えてしまったところですよ。』

ここで述べられている二度の遭難は、前述したターラント行きのミッションの際の出来事をベースにしているが、どこまでが事実か断定は難しい。特に後者の場合、自己をオデッセウスになぞらえて楽しんでいる印象が強い。

『英軍は、地上にあっても、戦さ上手です。なるほど数の上でも我が軍に勝ってはいますが、我々の軽率さを打ち負かして当然の冷静さ、

決然たる勇気のほどを、彼らが見せたことも、否めないでしょう。彼らは我々に向かってゆっくり前進してきます。我が軍は、早足で突進し、撃つこともなく攻撃をしかけます。彼らは、至近距離まで待ち受けます。そして彼らの最初の発砲が、我が軍の幾列をも薙ぎ倒すのです。時を置かず、我が軍は敗走を始めます。彼らが、我々を追うことはありませんでした。何故だかは、わかりません。

戦闘後の彼らの行動は、極度に寛大なものでした。我が軍の負傷者に対しては、我々自身以上のいたわりを示したし、負傷者を、また、我が軍の逃亡兵を、農民たちの憤りの手から逃れさせるため、多額の資金を使いもしました。私は、スチュアート卿（訳注：この戦いでの英軍総司令官）がある将校に宛てた手紙を読みました。傷のため乗船させることができなかったこの将校を、卿は村に残しておかざるを得なかったのです。これ以上に高潔な文面を綴ることはできないでしょう。我々は、カステルフランコでのオーストリア軍負傷者に対して、その中にフランス人として生まれた将軍ドゥ・ロアン公がいたにも拘わらず、同じ配慮を示しませんでした。こういう考えはすべて、英軍との戦闘の記憶がまだ鮮明だった時に、私が自ずと抱いたものです。

我が軍の将校たちの大半が、衣服その他、身の回りの品々を、置いたままの場所に見出しました。無くなっていた場合も、それは我々自身の下僕たち、もしくはナポリ軍の略奪によるものです。英軍が持ち去ったのは、身分証明書といったたぐいの書類だけでした。これが我々のやり方と違うところです。彼らは、その土地が彼らに提供したものの代金を、正確に支払っています。我々とは言えば、住民から食品、金銭を力づくで巻き上げます。フランス軍の全将軍について次のように言えるでしょう、

「ある者はたくらんだ、町を、住居をうち壊し、

黄金の杯で飲み、紫の衣の中で眠ることを。」

(ウエルギリウス『農耕歌』)

我々が、どんな風に住民たちに慕われ、愛されているかは、想像に
難くないでしょう。カラブリアには、青年が、少なくともフランス人
を一人殺してからでないと、結婚しない村もあります。私を、下にも
置かぬもてなしで迎えた家庭でも、子供たちは、私の愛撫を必ず嫌悪
をもって、はねつけました。

このような気散じに始終恵まれていたのでは、古代に思いを致す気
に到底なれないこと、容易にお解り頂けるでしょう。道々なにかの遺
跡に出会っても、ポンペイウスにならって、「そのような名所旧跡を、
訪ねる気分にもなれず」というわけです。私は、私のわずかな持ち物
の難破から、小さな書物を一つ救い出しました。毎日なんページかを
読んでいた本で、自分で、「我が日常の祈祷書」と名付けていたもの
です。Turnèbe 版の「イーリアス」ですが、バルテレミー神父の手
にあるのをご覧になったことがあるかもしれません。というのも、こ
れは神父から私のところにやって来たもので(ああ!もとの持ち主とは
なんたる違いぞ!), 散歩の時に神父はいつもそれを携えていたそう
ですから。私も、一人きりにならないために、いつもそれを持ち歩きま
した。ところがそれを、先日のこと、どうしてでしょうか、私の馬を
引いていた兵隊に、手鞆ともども託したのです。この兵が、殺され、
身ぐるみ剥がされました。これまでに私は、8頭の馬を殺されたり、
奪われたりしました。衣服も、下着も、外套も、ピストルも、現金も、
下僕たちも、奪われたり、殺されたりしました。でも、私が残念に思
うのは、ただ私のホメロスだけです。それを取り戻すためなら、唯一
一枚私に残っているシャツだって差し出すでしょう。それだけが私の仲
間、唯一の慰め、休憩時間、夜の憩いの唯一の話し相手だったのです。
こんな私を、仲間は皆笑っています。奴らだって、最後に残ったトラ
ンプカードをなくしてみるがいい。そのとき、奴らがどんな顔をする

ことか！

こんなつまらないことを、くどくどと述べたてるのは、あなたのご好意への甘え過ぎでしょう。もしどこかで足を止め、周囲を見回す時間さえあれば、すべてがギリシャであり、古代であるこの土地が、あなたの関心と呼ぶ題材を提供すること、疑いをいれません。そうなれば、私の手紙にしても、差し上げる先にもっと相応しいものになるはずですが。

辺りには、重要な遺跡が、プロセルピナを祀ると言われる神殿があります。そこから引きずり出された、見事な大理石像が、今ではローマに、ナポリに、ロンドンにあります。でき得るならば、なにか残っていないか見にいってみましょう。そして、もしそれまで生きていられれば、そしてその価値があるならば、ご報告も致しましょう。この長々しいお手紙の最後になりましたが、*de Sainte-Croix* 夫人へ、そしてまた、*Larcher* 氏へも宜しくお伝えください。氏に対しては、ホメロスの詩句をもって、ご挨拶せねばなりませんまい、

「ご老人よ、私どもはあなたのお力をよく存じております。 /

お姿を拝し、仰天いたしました！」（原文ギリシャ語、いずれも、『イリアス』から。[146] の仏訳による）

ドイツの戦場のように、あの方へのロドトスを手許に持っていないのが、悔やまれます。もうほとんど諳んじてしまおうという段になって、ちょうど最近我がホメロスを失くしたように、失くしてしまったのです。私が決して失ったりはしないもの、それは、あなた方お二人への気持ち、尊敬、賛嘆、また、敢えて言わせて頂くなら、友情と申すもの、これは、アルカイオスも言うように、「私にとっては、最後に地下に降りるもの」（原文ギリシャ語）なのです。

あなたの慎ましく、従順なる僕より。

クーリエ

ナポリ派遣軍砲兵中佐

Chef d'escadron d'artillerie Armée de Naples】

すでに述べたように、クーリエは1812年の時点で、特別に思い入れのある手紙百通を選んで、『Cent Lettres Recueillies 書簡百選』を編んだが、この手紙もその中の一つである。そして、この手紙の場合には、『書簡百選』に入れるに際してすでに、クーリエはかなりの訂正を施している。以下で、どのような訂正が行なわれたかについて、主要な点について見ておきたい。

まず目につくのは、冒頭に置かれていた、敵軍を賛美しながらの戦闘報告が、訂正後には、そっくり削除されていることである。そしてその代わりに、「最近3ヶ月間の大ギリシャ、つまりカラブリア地方での出来事＝歴史 (histoire) がまとめて取りあげられる。そして興味を引くのは、そこで起きた出来事が、「horreurs＝恐ろしい、おぞましい事 / bouffonneries＝滑稽な、道化じみた事 / farces＝茶番劇 / sottises＝愚かしいこと / férocités＝残忍な仕打ち」と言った言葉で、言い表されていることである。クーリエにとっては、こうしたものが「歴史のカンバス」、生地であり、ヘロドトスや、ツギジデスは、そこに様々な事件という装飾を、刺繍を施しただけなのである。おそらくクーリエは、もう以前から戦争を、滑稽な営みとして捕らえ始めていたのだろう。ただ、1806年、実際の戦闘に参加している段階では、まだそれが言葉にはならなかった。その感覚が、『書簡百選』、つまり、すでに除隊した後、同時にナポレオンの威光も薄れかけていた時期には、はっきりした姿をとって現れたのではないだろうか。

元の手紙と訂正されたものの違いは、他にも色々ある。例えば、ゲリラとして戦う住民たちも、前者では「山人」と呼ばれているが、それと同じ文脈で、後者では「我らが良き友 nos bons amis」と戯文的、反語的な言葉で呼ばれ、ゲリラへの討伐遠征も、後者では、「散策 promenades」と

なる。また、クーリエ自身が捕らえられ、処刑の危険に曝されたことが述べられるが、『書簡百選』の版では、「処刑の方法についてゲリラ同士の間で討議が行なわれ、そこで自分も意見を述べることを許された *Je fus admis à opiner.*」という情景が、淡々と、と言うより、ある種の滑稽みを伴って語られるのである。後者が元の手紙に比べて、より文学的になっていると評されるのも、こうした違いの故だろうか。さらにこの手紙は、クーリエが不慮の死を遂げた年にもなお取りあげられて、いくつかの訂正が試みられている。

(10) (第一回) 辞表提出

『書簡集 2.』[253] / 『プレイアード版全集』(CI)

絶えざる緊張を強いられた年、1806年の末頃、クーリエはようやく念願が叶って、ナポリに呼び戻される。そして、比較的平穏なほぼ1年を、ギリシャ語研究、図書館通いに多くの時間を費やしながら過ごす。すでに我々も見たように、何年か前からその本文校訂と翻訳を試みていた、クセノポンの『乗馬術』を実地に試みるため、蹄鉄をつけないギリシャ流儀の馬に乗って、ナポリの町を走り、人々を驚かせたのもこの頃のことである。

やがて、北部イタリアでオーストリア軍が再び勢力を取り戻し、クーリエも、所属する連隊本体が駐留するヴェローナへ戻るべく命じられる(1807年8月)。クーリエは命令に従うが、クーリエ式旅の流儀は変わらなかった。ナポリを出発、まず近くのヴェスヴィオ山麓の *Resina* (現在の *Ercolano*) で2ヶ月、次いでローマで3週間を過ごし、さらに、フィレンツェ (この地の図書館で、古代ギリシャのロンゴスの作品、「ダフニスとクロエ」の原典完全版のマニュスクリを発見する)、ミラノ、プレシア滞在を経て、翌1808年1月28日、ようやく赴任地ヴェローナに到着する。6ヶ月かけての出頭は、禁固刑 (*arrêts*) を招いたが、クーリエには少しも悪びれるところが見られなかった。

やがて、故郷ソーレーヌに所有する家督資産の整理監督の必要に迫られたクーリエは、休暇願いを提出するが受け入れられない。それではと、今度はスペイン戦線へ転属を願い出る。イベリア半島に向かう途中、もしくは帰路に、故郷に立ち寄ることを目論んだのである。しかしその願いも却下された。その結果、何度か書簡にも現れていた、「もうこんなヤクザな職業 *vilain métier* はやめよう」という気持が強くなったのか、辞職願いを提出する。願いは、3月10日に受理されて、クーリエは早速パリに帰ってしまう。ここでとりあげた手紙は、日付からすると、辞職願い提出直後のものである。

宛名人グリオワ Griois (1772~1839) は、Châlons 砲兵学校でクーリエと同期生。その後、ピアチェンツァなどでも同じ連隊に勤務していた。この手紙に見られる親密な調子は、そうした関係から許されたのであろう。のちに、人々からその信憑性を多くの人々から認められた『回想録』を著したが、そこで、クーリエの戦闘記述が事実在即していること、また、クーリエが、騎乗者としてはすぐれていたが、軍人としては几帳面さに欠けていたことなどを主張している。ここで並んで名前のががっている、アザールも一歳年長で同じ連隊の上官である。

(ヴェローナ駐留騎乗砲兵隊大隊長 Major グリオワ氏へ) / ミラノ

1809年2月7日

『いやほんと、大隊長殿、これで失礼いたします、正直、只々心残りでございます。いえ、これ本心からの言葉、外交儀礼ではございません。お仲間の皆様とお別れするのは、残念至極。ごいっしょに、楽しい時間も過ごせました。でも、心から楽しむためには、自由の身の方がよろしいようで。

悪魔が、フランスにある私の資産にちょっかいを出しました (*Le diable s'était mis dans mes affaires en France*)。様子を見ようと、休暇願

いを提出、それは拒否。その前に、私はスペイン行きを願い出ておりました。行きしなに、それとも、帰りしなに、故郷に立ち寄ることくらいは可能かと考えまして。いやはや... 耳を貸して頂くことすらできないとは！ 本日、提出するのは我が辞表、大臣閣下もさぞお喜びのこと。よもや、これには、とやかに言われますまい。

あなたには、金銭の貸しがある。「あなた」というのは、「連隊」のこと。おそらく去年から、私の「名誉勲章」付きの手当が入っているはず。この地で受け取れるよう、手を打って頂きたい、恩に着ます。

さらば、大隊長殿！さらば、アザール殿！そして、知る知らぬの別なくすべての仲間よさらば！

さらば、友らよ！ 冷たく飲め、熱くして食え、臨機応変寝るがいい！ さらば！

クーリエは、1804年6月、Jourdan 将軍自身の手から、名誉勲章を拝受している。なおこの手紙も、「書簡百選」の一つである。

(11) 「大軍隊」体験の試み

『書簡集 2.』[362] / 『プレイアード版全集』(CXXXII)

1809年3月、クーリエに辞職許可がおりた時、彼が Châlons 砲兵学校に入学してから、17年近い月日が流れていた。「ヤクザな仕事」から解放されたクーリエは、その後どのような道を歩んだのだろうか。ツーレーヌに持っている家督資産を建て直し、守りながら、本格的に古典古代の世界に浸ろうとするのだろうか。事実はそうではなかった。我々後世の読者にとっても思いがけない一幕が、準備されていたのである。

辞職を受理されたクーリエは、念願のパリ復帰を果たしたが、そこで彼を待ち受けていたのは、皇帝陛下の許、国を挙げての戦闘準備、ドイツ・オーストリア方面の戦場での最終的勝利を目指しての熱狂だった。そのた

め、見切りをつけたスペイン戦線から、続々と兵力が集められ、新たな戦場となるべき地に送られていく。こうした熱に浮かされたような雰囲気は、多くの国々が、近・現代の歴史を通じて経験したところだ。

クーリエはこれまでことあるごとに、ナポレオンに対して、冷たい、距離を置いた、嘲笑的態度を見せてきた。そうした彼までが、この熱の中に取り込まれてしまうとは...それにクーリエはこれまで、ナポレオンが直接に指揮をする「大軍隊 *la Grande Armée*」とは違った所で、いわば、戦線の片隅で戦ってきた。戦う相手も、正規の軍隊であるよりも、住民や「山賊」たちの場合が多かった。「今、自分も、皇帝陛下の許で、華々しく戦いたい。」嘗ての砲兵学校での同窓生、友人たちの多くが、自分よりも上の階級の立派な砲兵士官として、新しい戦場に向かおうとしている姿も、或いはクーリエの心に、これまでついで感じたことのなかった、昇進への野心を目覚めさせたかもしれない。(後述の *Thomassin* 夫人からクーリエに宛てた手紙 [283] には、クーリエが、軍隊復帰のためのウィーン行きを、自分でくじを引いて *à la courte-paille* 決めるのを見たという記述もある。最後の段階で、丁半によって決意したということか。)

軍への復帰を決意したクーリエは、早速以前から知り合いの高官、*Lariboisière* 子爵将軍を通して手続きをとり、辞職受理からちょうど3ヶ月後の1809年6月14日に認可され、ナポレオン軍によって占領されているウィーンに行って待機するよう、指示される。

実際には、クーリエの思惑がことごとにはずれ、滑稽とさえ言えそうな結末を迎えるのだが、以下の手紙は、それから3ヶ月後、再度、そして今度は最終的に軍職を去ったクーリエ自身が、この間のいきさつを一種の弁明書の形で綴ったものである。

(パリ在住 *Gassendi* 将軍へ) / 1810年9月(5日) *Tivoli* から 『将軍閣下、貴殿、もしくは大臣閣下が、私のことを知りたがっておられ

ると、軍職を去ったあとの私が、どうなったかを知りたがっておられると、聞きました。

皇帝陛下によって私の辞任が認められ、私はミラノからパリへと参りました。パリでは、若干の身辺雑事を整理整頓の後、スペイン方面軍からドナウ川方面軍へと移動中の、旧友である士官たちと出会い、軍職への復帰を、時を置かずに、決意いたしました。私は、私を臨時に働かせることを *Lariboisière* 将軍に許すという、戦争大臣の書状を携えて、ウイーンへ行きました。この書状は、後日改めて正式な入隊認可証が授与されることを約束する、同方面軍 *major général* による別の書状によっても、確認されておりました。私は、これまた、臨時措置としてではありますが、第4師団に編入されました。

本来私の手許に入るべき金銭の支払いが滞り、装備に支障をきたしましたので、私は、以前から存じ上げる *Lariboisière* 将軍に救いを求めました。ありがたいことに同将軍は、私に、必要なものすべてについて、助力を惜しまないと言ってくださいました。私は、この約束を当てにして、全軍中でただ一頭売りに出ていた馬を、売り手の言い値で買い求めました。ところが、代金を支払うために、将軍のご好意にすがるという段になると、将軍の思惑は変わっていたのです。それでも私は馬を手放さず、パリから届くはずの金をあい変わらず待ちながら、2週間の間乗り回していました。しかしながら、遂に売り手が(バイエルン軍の将校でした)、私に代金の支払いを要求し、さもなければ、馬は取り戻すと宣言しました。7月4日、正午頃のことでした。折しも、その晩から始まる作戦行動のため、誰もが忙しく立ち回っていて、必要とする60ルイを私に貸そうとする者はいませんでした。以前、私から類似の恩恵を受けた人間が何人かその場に居合わせていたにも拘わらずです。というわけで、私は作戦開始数時間前に、乗馬なしという状態に置かれてしまったのです。かてて加えて、私は

すっかり体調を崩しておりました。辺りの鳥々のひどい湿気に、多くの仲間が高熱を訴えていましたが、私もその一人だったのです。おまけに、数日前からなにも食べていないので、私の衰弱は極度にまで達しておりました。それでも私は、アレキサンダー島の砲台陣地まで、這うようにして辿り着き、砲撃が行なわれている間中、そこに留まっておりました。参謀たちが私の姿を見て、私に命令を下しもしました。皇帝陛下も、ご自身、私に、言葉をかけられました。私は、第一陣の部隊といっしょに舟に乗り、ドナウを渡りました。私がよろよろしながら、辛うじて立っているのを見た数人の兵卒が、とある廢屋へと運び込んでくれました。私のすぐ横で、バルトラン將軍も、夜を過ごされました。朝になって、敵は退却したのですが、私には、司令部の後を追うどころか、立っていることさえ不可能でした。夜中降り続いた豪雨と寒気が、完全に私を叩きのめしてしまっていました。午後の3時頃、私の見るところでは、どこぞの將軍の下僕とおぼしき者たちが、私を近くの村まで荷物のように運び込み、そこからは、車に乗せて、ウイーンまで連れていってくれました。

何日も経たないうちに、私は体力を回復しましたが、かくも見事な一大会戦にも参加し損ねた今となつては、自分が願ったようには、もはや軍務に復帰するわけには行くまいと考えました。それに、私が直属の上官として望んでいた方とも、仲違いしてしまったのですから。そして、給金も、正式な入隊認可証も未だ受け取っていない状態である以上は、前言を翻せないほどには深入りしたわけではないと考えて、再びストラスブルヘ立ち戻ったのです。そこを出てから、ほぼ一ヶ月後のことでした。そこから私は、*Lariboisière* 將軍に、あらゆる帳簿から私の名前を消してくださるよう依頼しました。常日頃、私に好意を示してくださっていた *Aubry* 將軍にも、同様の主旨の手紙を送りました。そして、お二人のどちらからも返事を頂いたわけではあ

りませんが、私としては、お二人が、私の砲兵隊への一時的復帰がなかったものとして、物事を処置されたことを、少しも疑ってはおりません。

それ以後、将軍閣下、私は、スイス、イタリアを經巡り、只今は、コルフ（ケルキラ）島に渡るところでございます。そこから、何の障害もなければ、エーゲ海の島々を訪れ、さらに、エジプトとシリアを訪ねた後、コンスタンティノープル、ウイーンを經由して、パリに戻ることにしております。』

軍隊復帰の失敗の原因を、もっぱら、上官の約束違反、仲間の非情、健康状態などに帰するクーリエの態度に対して、Robert Gaschet をはじめとする多くの伝記作者は厳しい。例えば、Lariboisière 将軍の約束違反にしても、クーリエの勝手な思い込みであるとか、戦闘直前という慌ただしい時に、友人から借金をしようとするなどとは、どだい無理な話であるとか、あるいは、ある銀行家が馬を買うための資金を提供していたにも拘わらず、クーリエはそれを断わった等々、クーリエにとって不利な証言が並べられている。そもそも、アレキサンダー島での参戦も、嘘ではあるまいかとも。これに対して、G.V.L.D. は、Thomassin（スイス旅行中に、クーリエが知り合った夫妻）がクーリエに宛てた手紙 [331] を引いて、クーリエが、Lobau 島（砲台の設けられたアレキサンダー島とは、固定された橋でつながっていた）で実際に病に苦しんでいたのではないだろうかと反論している。

(12) と (13) 軍職離脱

(12) 『書簡集 2.』 [361] / 『プレイアード版全集』 (CXXXIII)

(13) 『書簡集 2.』 [390] / 『プレイアード版全集』 (CXLI)

「大軍隊」の体験が、思いがけない結末を迎えたクーリエは、いったんストラスブルに立ち寄ると、そのまま、パリに戻ることなくスイスに入

り、秋の初めまで自然を楽しむ。10月初めにはアルプスを越えてミラノに赴き、そこからフィレンツェへ。そこで、今後のクーリエにとって、痛恨の事件を起こすことになる。

イタリア戦線で勤務していた頃、フィレンツェの図書館で偶然、『ダフニスとクロエ』の原典完全版マニュスクリを彼が発見したことはすでに我々が見たところである。それを、ゆっくり検討しようとしてやってきた今、ギリシャ語マニュスクリの肝心な箇所、うっかりインクを垂らし、染みをつけてしまったのである(1809年11月10日)。クーリエは、うっかりした過ちと主張したが、やがて、「他の学者、とりわけイタリアの研究者に見せないための故意の仕業」などと疑われ、国際的な問題にまで発展して、クーリエを悩ませることになる。

他方同じ頃、クーリエは、軍当局から脱走兵の疑いをかけられていた。いったん軍隊に復帰はしたものの、給金を支払われたわけでもなく、約束された正式な復帰許可証が発行されたわけでもないのだから、独断で隊を離れたことについては、問題なしと考えていたのだが、当局は、そう簡単にはクーリエの主張を、認めようとはせず、クーリエのとった行動は、脱走ではないかと問題視されることになる。この問題の解決には、フランス軍にとっての戦況の不利、そして最終的には政体の変化という、時の流れを待つことになる。我々も、この時期のどっちつかずで落ち着かない状態のクーリエの姿を見ながら、彼の軍隊時代と別れを告げることになる。第一の手紙を、Genevièveは、我々がすでに見たGassendi将軍に宛てた『弁明書』風の手紙の直前に置き、Sauteletは、「砲兵隊将校宛、1810年9月12日付」としている。二つ目は、翌「1811年1月5日、ローマから」で、Sauteletによれば、在パリ、オリエント学者Sylvestre de Sacy男爵に宛てたものである。

(12) (砲兵士官... へ) / 1810年(9月12日) Tivoli から

『まあ聞いてくれ、僕の問題は、君が聞かされているよりも、はるかに深刻なのだ。大臣が二人して、僕を追い回している。一人は僕を、脱走兵として銃殺したがつている。もう一人は、僕が、ギリシャ語を盗んだかどで、絞首刑にしようとしている。僕は最初には答えるね、「大臣閣下、私は軍人ではございません、したがってまた、脱走兵でもございません」とね。第二のには答えるね、「閣下、私にはギリシャ語など、糞喰らえです、ですから盗んだりはいたしません」と。ところが、お二人、黙ってはいない、一人は、「お前は軍人だ、何故と言って、一年前、お前は L...や、お前を仲間呼ばわりするろくでなし共といっしょに、ローバウ島で酒に酔い潰れていたではないか」。もう一人は、「お前は絞首刑だ。何故と言って、お前は、ギリシャ語の 1 ページを汚して、台無しにした、それも、ギリシャ語も、他のどんな言葉も知らない偽学者たちの歓心を買うために。そんなことを言われて僕は、嘆かずにいられない、「皇帝陛下の健康を願って一杯飲んだお蔭で、銃殺になるなんて？ インクの汚点一つのせいで、絞首刑だなんて？』』

『中略』(クーリエは、二人の大臣によるこうした追求に対して、「そんなものはいっさい気にしていない」と記し、続いて、「大軍隊体験」に話しを移す。)

『僕は、ウイーンに行ったことを後悔はしていない。バカなことではあったけど。ただこの「バカさ」は、僕にとっていい結果をもたらした。なにしろ僕は、「金びか服」と、その取り巻き宮廷ママムシー一式を、間近に見たからね。まさに見物だったぜ。しかも、それを楽しみ、その真実を見極めるに必要な時間だけで切り上げたからね。

君が僕を、幸せな男だと思うのは正しい。但し、君自身の不幸せを嘆くのは、間違っている。君は奴隷だ？ まあ、待ち給え、奴隷でない人間なんて、いるだろうか？ 君の友人だった *Voltaire* もこんな

ことを言っている：「主人にその存在を知られていない奴隷は、幸せ者だ *heureux sont les esclaves inconnus à leur maître*」(*L'Orphelin de la Chine*, 1 幕, iii 場の台詞から)。この幸福だけは、確実に君のものだ。ひょっとしたら、君はこのことで悔しがっているのかもしれないね？ とんでもないことだ！ 君が羨むべき人間なんていない。君の年齢で、強健、健康... 自然が君に示した善意に、なんて君は恩知らずなんだ。

ではさらば、手紙を書いてくれて嬉しい、いつでも便りを楽しみにしているぜ。』

「金ぴか服」と「ママムシー一式」(*l'oripeau et les mamamouchis*)とは、G.V.L.D.も言う通り、「ナポレオンと彼を取り巻く元帥、高級参謀たち」のことだ。モリエールの表現を借りての、思い切り揶揄した表現である。

(13) (Silvestre de Sacy 氏へ) / 1811年1月5日 ローマから

(はじめにクーリエは、今その渦中にある「インクのみしめ事件」の成り行き、クセノポンの翻訳出版準備の進行状況について、著名なオリエント学者 *de Sacy* に報告をする。それから続けて...)

はい、ご覧の通り、とうとう私もこのヤクザな職業とは縁を切りました。多少遅過ぎた感のあるのが、悔やまれるところですが。しかし、この時間が、まるきり無駄だったというわけではありません。書物が、いい加減でまかせを語っている物事を、私は、この目で直接見たのですから。今では、プルタルコスを読んでも、腹を抱えて笑うばかりです。もう、偉大なる英雄などというものを、信じたりはしません。

私がイタリアに留まるつもりかどうかについてお尋ねですが、お答えできるのは、するつもりのことだけで、実際にどうなるかについては、神のみぞ知るです。と申しますのは、未来が通常持っている不確かさに加えて、私はあまり不動の方針といったものを得意としないば

かりか、一旦の決定にあまりに固執するのは、一種の奴隷状態と変りがないと考えるからです。今のところは、ナポリへ行きたいと思っております。そこから、次には、ケルキラへ。で、ケルキラまで来れば、そこはアテナイへの門ということではないでしょうか？ でも、場合によっては、ナポリにも、ケルキラにも、アテナイにも行かず、パリへ向かうかもしれません、そこでは先生にお会いできるという楽しみも控えていますし。でも、ひょっとしたら、ここから動かないかもしれません。と、こんな具合に私の意志は、羅針盤の全方位を廻っています。それにしても、私には、ギリシャを訪れたいという、生まれながらの望みがあります。これは、私にとってのメッカ巡礼、とお考えくださって結構です。

私のロンゴス注釈への補遺となっている紙きれ一枚が、お手元に届いていない場合には、お手数ですが、*Marchand* 夫人の許まで、どなたかそれを取りにやらせて頂きたい。それなしでは、お手持ちの版は、完全版とは申せなくなります。』

(12) (13) 両方とも、「書簡百選」に入れられている。

おわりに

フランス革命・帝政時代の軍人として思い浮かぶイメージは、フランス各地、とりわけ南の方からやってきた志願兵が、勇ましくラ・マルセイエーズを歌いながら戦線に向かって行く場面であったり、あるいは、パリの観光名所凱旋門にその名前が刻まれた、数多くの將軍たちの姿であったりする。そのような図が、いつの間にか外国人にさえ与えられ、広まったと言ふべきかもしれない。そして、同じ時代のポール・ルイ クーリエほどそうした図から程遠い軍人はいないだろう。

むしろ、クーリエの場合は、革命期以前から父親によっていわばその道

をあてがわれていた職業軍人であり、砲兵学校卒業者というエリート軍人である。従って、比較はもともと意味がないと言えるのかもしれない。しかしそれでも、クーリエが士官候補生として砲兵学校に入学したのは、20歳という年齢だったこと、また正に祖国が外国の軍隊の攻撃に曝され始めた時期だったことなどを考えれば、「feu sacré 聖なる火」(祖国を思っただけの「たぎる血潮」とでも訳せようか)と呼ばれるものを、わずかでも感じるのがむしろ当然だったのではあるまいか。

これまで我々の読んできた手紙に記されたクーリエの行動には、一般的な軍人としての尺度にはなんとも当てはまらないようなものがいろいろあるが、中でも目につくのは、任地に赴く際の、「悠々とした」時間のとり方である。3ヶ月を費やした「任地への旅」(6)、半年かけてのヴェローナ本隊への移動、また最初のイタリア派遣に際しては、11月の発令から任地ローマ到着まで、1ヶ月以上をかけている。むろん、現代と違った旅の事情など、また戦時体制の土地であることなど、早急な判断はできないが、さすがにヴェローナ到着にさいしては、「禁足 arrêts」の処罰を受けている。

さらに、クーリエの手紙を読んでいくと、彼には「敵」というものがあつたのだろうかという疑問にすらとられる。彼には、「敵」という感覚が欠けていたのではあるまいか。むろんクーリエは、絶えず命を危険にさらしている。駐屯地でも、移動の途中でも。そして事実、彼自身言うように、なん度も「敵」につかまり、処刑寸前にまで行くことさえあつた。それでもなお、相手を描く際に少しも「憎しみ」が感じられないのは、私だけの印象だろうか。もっともクーリエの場合には、相手となるのは、多くの場合、正規軍の兵士ではなく、土地の住民、農民、「山賊」たちで、クーリエとしては、「自分たちの土地に、理由はなんであれ、踏み込んでくるフランス軍に対して反抗するのは、完全に彼らの権利である」と思わざるを得なかったのではないだろうか。クーリエとしてみれば、彼らを憎む

理由など、まったくないのだ。ただ同時に目につくのは、さりとしてこうした相手を救おうとか、助けようという気は少しもないことだ。「目には目を」といった反応とは違った反応で、相手にはなんの同情も示さない。と言うより、敵も味方もない、自分の部下が殺され、身ぐるみ剥がされたという事実も、クーリエは特別の感慨なしで記すのだ。(「敵」がないということとは、即ち「味方」もないということかもしれない。)

「敵がない」という感覚は、時としては、一歩進んで、「敵軍礼賛」につながる。(9)で我々が見たような、自軍の敗北にさいして勝者に向けられる冷静で、心からの賛美は、そう頻繁にあるものではあるまい。

しかし、やがては、こうした賛美も彼の記憶の中から姿を消して、戦争は、クーリエにとって、人間の営む「bouffonnerie 猿芝居, farces 茶番劇」でしかなくなる。同じ手紙の5年後のヴァリエントが、クーリエが究極的に達した点を示しているのだ。(その間には、ナポレオン皇帝を間近に見ての、「大軍隊体験」(11)も挟まれる。)

このような、およそ「軍人としてはあるまじき行為」はどこから生まれたのか。むろん第一は、それをとにかくも寛恕した当時の軍人社会が必要だったろう。今は、それはそれとして、考えよう。クーリエ自身の性格、父親の教育、躰、そうした中でとりわけ見落とせないのは、言うまでもなく、クーリエの古典古代世界との深い係わりである。

はじめは父親から当てがわれた一種の「教養」だったが、やがてそれはクーリエ自身のものとなって、父親の制止を振り払うまでになる(母親への手紙(2))。軍務の合間を縫っての(クーリエの意識では、軍務の方が「合間」かもしれない)、ロンゴス、クセノポンなどの翻訳作業はもとより、相手を選んでではあるが、手紙の中での引用文の多様さ、また、これはクーリエを信じての上だが、イーリアス、ヘロドトスをほとんど諳んじていたこと、「本当にギリシャ語がわかる人間は世界で4、5人、自分はその一人」とクーリエは豪語していたと言われるが、その自信(もしくは傲慢さ)、そうし

たことすべてが、どれほど深くクーリエが古典古代の世界にのめり込んでいたかを示している。たっぷり時間をかけての「任地への旅」も、多くの時間が、図書館訪問、石碑文解読のために費やされている。南イタリア、カラブリア地方も、クーリエにとっては、「マグナ・グラエキア」であり、イタリア半島全体を貫っても、ギリシャ神話の世界シチリア島に渡れなければ、その征服は「無に等しい」のだ（(7)「長靴の底で」）。思うに、クーリエは、図書館で原典に当たっている時だけではなく、常に、ひょっとしたら、戦いの最中でさえも、頭の中はギリシャ、ローマの世界を駆け廻っていたのではないか。そして、(想像を逞しくするならば)この古代は、ヨーロッパ全体の祖国であり、キリスト教とともに、長期にわたってヨーロッパ全体を支え続けてきたものでもある。その始原の中で今なお息づいている人間クーリエに、どうして、イタリア人、イギリス人、フランス人の区別がつけられようか。

数多くの書簡の中から、わずかに十数通をとりあげただけではあったが、なんととはなしに、私が最初に見たクーリエの文章（『…他意なき演説』）ともつながりそうである。

Paul-Louis Courier 略年表（誕生から軍職離脱まで）

（クーリエ個人についても、社会情勢一般についても、書簡理解を助ける事柄に限ってある。訳文の目次を兼ねる）

1772 1月 4日：パリで誕生（父＝Jean-Paul Courier, 39歳 / 母＝Louise Elisabeth de Montdeville, 36歳。父母ともに裕福な市民階級に属し、子供はその日に洗礼を受けたが、何故か、父親不在の私生児として登録されている。1777年2月に父母は結婚し、洗礼証書も作り直され、正式な嫡出子となる。それまで、生後5年間のクーリエについては、養育の場所などわかっていない）。

- 1777-1784 ツーレーヌ地方で土地の売買を営んでいた父が、前年サン・マル・ラ・ビル村に買い求めた家 (la Véronique : ロワール川を望む) で、少年時代を過ごした。あばた顔という痕跡を残した天然痘、腹膜炎を患いはしたものの、乗馬、ポーム、泳ぎ、野原の散策と、大いに戸外の生活を楽しんだ (その後緩慢進行の結核を患い、軍隊時代にも、時折の咯血に苦しみはしたが)。同時に父親は、一人息子の教育に手間ひまを惜みせず、クーリエを近隣の町の学校にやったり、地方で有名なラテン語、文学、数学の教師につけさせたりした。父は息子に、彼自身と同様のギリシャ・ラテンの教養を身につけさせ (父自身、旧約聖書詩編の一部をフランス語の詩に訳したりする教養人だった)、同時に、軍関係の工学分野での要員として身を立てさせることを夢見ていた。この分野は科学的知識を必要とし、旧制度下の軍組織でも、平民が将校に出世できる領域だった。
- 1784 夢を夢で終わらせないためには、一流の教師を息子につけなくてはならない。そのためにはパリに出なくてはならない。クーリエ家の親子3人は、パリへ移住することになる。そしてそこで、父は息子のために超一流の教師たちを用意する。数学、自然科学、工学のためには、王立パリ陸軍学校教官のラベ Labbey をはじめとする教師陣、他方、古典学のためには、当時ヘレニストとして著名だった、アカデミー会員ヴォヴィリエ Vauvilliers がそれだった。これ以後クーリエは、数学、古典学の両者に、いつも並行して没頭することになり、さらには、軍人となった後も、古典学への熱中度はますます増していく。
- 1789 7月14日：バスターヌ要塞監獄が襲われる。伝記作者によれば、「この日、クーリエはシャンゼリゼ広場でボール遊びをしていた。そこで、アンヴァリッドへ向かって行進する群集を見て、それに加わり、いっしょに建物の中に入って略奪者に紛れ込み、短銃一丁を持ち去った」。同じ伝記作者はさらにつけ加えて、「しかし、他方彼は同じ年に、『ダフニスとクロエ』(ロンゴス)の翻訳に着手した」とも記している。
- 1791 6月20日：ルイ16世一家、国外逃亡を試みる。
 9月28日：新政府によって Châlons に設立された砲兵学校に、以前から個人レッスンを受けていた前述の Labbey が、教官として任命される。クーリエはこれをよい機会として捉え、工兵から砲兵への切り替えも素直に受け入れ、父の同意も得て、難関とされる新設の砲兵学校入学試験に挑戦を決意する。
 9月29日：(1) 軍人、同時に古典古代への道 (父へ)

- 1792 9月1日：クーリエ, Châlons 砲兵学校第二期生として入学試験合格。
9月20日：Valmy で、フランス軍、砲兵隊の活躍もあってプロイセン軍に勝利。
- 1793 1月21日：ルイ16世処刑。
6月1日：クーリエ卒業試験に合格、2等中尉に任官、両親に会ってから最初の駐屯地 Thionville に向かう。
10月末：〔2〕駐屯地へ母からの小包(母へ)
- 1794 Trier 攻撃, Mainz 攻城作戦などに参加。翌年にかけて厳冬の戦場を体験する。
4月29日：〔3〕上官の過ちを手際よく処置(戦友市民 Allix へ)
- 1795 6月：健康状態を考慮され、南フランスでの後方勤務に移される。
2等大尉に任官、鑄造所視察官となる。
- 1796 2月13日：父 Jean-Paul Courier 没。
5月：Toulouse に派遣され、1798年1月まで滞在、近隣数県における、砲兵関係の物品納入を管理する。この間、同年代の若者たちと交際。博学なポーランド人 Klewanski (Chlewaski) もその一人。
- 1798 2月：パリで2ヶ月の休暇。
8~9月：Rennes のイギリス方面軍司令部勤務。
11月：イタリア方面軍での勤務を命じられる。当時、ボナパルト将軍による勝利によって、ローマ、ナポリには、共和国が成立していた。イタリア方面軍の任務は、イギリス軍と組んで抵抗を続けるナポリ王朝軍との戦いだった。
- 1799 1月~10月：砲兵隊物資納入監督官としてローマ勤務。図書館に通う。
フランス軍、各地で敗北。
1月8日：〔4〕ローマ共和国で (Klewanski へ)
10月27日：ローマ撤退のさい危うく命拾い、イギリス軍の船でマルセイユに戻る。
- 1800 1月~3月：パリで咯血、病床につく。著名な古典学者でもある医師 Bosquillon の治療を受ける。
4月：回復期。古典学者たちと交際。
- 1801 4月~5月：重病。6月：回復期を la Véronique で。10月：la Véronique で母没。
11月27日：任地ストラスブール、第7歩行砲兵隊着任。著名な古典学者たちの知己を得る。

- 1802 3月25日：アミアン条約 (1792年来、フランスにはじめて平和が)。8月パリに移る。
- 1803 4月3日：再度略血。
10月29日：騎乗砲兵第一連隊少佐 (chef d'escadron) に任命。
12月16日：ピアチェンツァへ赴くよう命令される。年末、「大佐への忠告 *Conseil à un colonel*」を書く。
- 1804 3月18日：任地ピアチェンツァに到着 (命令を受けてから3ヶ月かかっている)。
5月：帝政か共和制かを問われる。 (5) 皇帝陛下を作る
8月3日：南イタリアの奥地ターラント派遣連隊に加わるよう命令を受ける。
9月14日：馬を買うなど、準備の後出発。
11月5日：Barletta に置かれた司令部到着。
12月2日：ナポレオン皇帝の戴冠、聖別式
- 1805 4月23日：(6) 任地への旅 (Lejeune 氏へ)
5月26日：ナポレオン、イタリア国王として、ミラノで戴冠。
9月：北部イタリアで、オーストリア軍の脅威が高まったため、クーリエの所属する部隊も、Veneto 州に呼び戻される。
11月23日：ヴェネツィア近くの Castelfranco での勝利 (クーリエも参戦)。
12月2日：ナポレオン、Austerlitz で勝利。
12月27日：ナポリの王朝が、中立の約束を破って、英軍と結託したため、ナポレオンは、ナポリ王を王座から追い出した。
- 1806 2月14日：Masséna 将軍指揮下のフランス軍、ナポリに入る。
2月17日：クーリエ、ナポリに入る。その後すぐ、カラブリア地方で戦っている Reynier 将軍のもとに派遣されることを自ら志願。
3月29日：Reggio di Calabria に着く。
4月1日：ナポレオンの兄 Joseph、ナポリ王の王座に就く。
4月(15日)：(7) 長靴の底で (...夫人へ)
4月21日：ターラントまで、大砲を取りに行くよう命じられる。失敗。
5月28日：(8) 百害あって一利のない宮廷 (Dulauloy 将軍宛)
6月26日：4月と同じようなミッションを再び命じられる。今度も失敗。
10月2日：(9) 敵軍礼賛／古代を生きる (de Sainte-Croix 氏へ)
11月14日：ナポリへ転任。図書館に通い、ギリシャ・ラテンの古典に浸る。
- 1807 8月：Verona の連隊本部へ戻るように命じられるが、6ヶ月かけて

命令に答える。途中フィレンツェの図書館で、ギリシャ語完全版『ダフニスとクロエ』(ロンゴス)を発見して喜ぶが、後日のためこの発見の事実は、誰にも話さない。

- 1808 1月28日: Verona 到着, 6ヶ月の遅れのため, 懲罰を受ける。
3月~12月: リヴォルノで, 参謀部臨時副主任, 実際にはあまり仕事もなく, 「食べ, 飲み, 眠り, 毎日泳ぐ」生活だった。
- 1809 2月7日: 〔10〕(第一回) 辞表提出 (グリオー氏へ)
2月25日以前: 資産整理のため休暇, またスペイン戦線への転属を願ったが受け入れられず, 辞職願提出。
3月10日: 辞職許可。
4月14日: パリに戻る。
6月10日: 軍復帰, 臨時措置として認められ, ウイーンで待機。
6月14日: ナポレオンにより軍復帰許可。
7月4日: ドナウ川渡河作戦の戦闘準備に加わったが, 馬が買えない, 熱病にかかるなどで, 結局総攻撃前夜, 戦場へは向かわず, 負傷兵といっしょにウイーンへ。その後, 復帰後給金の支払いもなく, 正式な入隊許可証 brevet も受け取っていない以上は自由の身と考えて, 独断で軍を離れる。
7月15日: ストラスブールに到着。そこからスイスに入り, 秋まで自然を楽しむ。
10月3日: アルプスを越えて, ミラノ着。
11月10日: フィレンツェで, 以前発見したまま秘しておいた『ダフニスとクロエ』のギリシャ語マニユスクリを検査し始める。「インクの染み事件」。
- 1810 9月(5)日: 〔11〕「大軍隊」体験の試み (Gassendi 将軍へ)
9月(20)日: 〔12〕軍職離脱 (砲兵士官へ)
- 1811 1月5日: 〔13〕軍職離脱 (オリエント学界の大御所 de Sacy 氏へ)
- 1812 7月初め: パリに戻る。
6月~9月: ロシア戦役。その後, 年末にかけて, ナポレオン軍総退却。
- 1814 3月: ナポレオン失墜, 第一次王政復古。
5月12日: 古典学者 Étienne Clavier の娘 Herminie と結婚。
- 1815 6月: ナポレオン皇帝の百日天下の後, ワーテルローの戦い, 第二次王政復古。新しい政府に対し多くの pamphlets を発表。
- 1821 4月末: 『シャンボール城購入募金についての...他意なき演説』発表。
- 1825 4月10日: 自分の家の下僕によって暗殺される。

参考にした書物

『書簡』 そのものについては、「はじめに」を参照。

『書簡』 以外の作品については、Maurice Allem 編纂の《*Œuvres complètes de P.-L. Courier*》, Éditions Gallimard, 1964（プレイアード版） /

Armand Carrel : 《*Essai sur la vie et les écrits de P. L. Courier*》（クーリエの最初の全集の巻頭に略伝風に載せられた。書かれたのは、1829年） /

Sainte-Beuve : *Causeries du lundi* の内。前半分は、1852年7月26日、後半は、8月2日に、いずれも、*Le Constitutionnel* 紙に掲載 /

Robert Gaschet : 《*La Jeunesse de Paul-Louis Courier*》 Paris Garnier frères, 1911 /

Robert Gaschet : 《*Paul-Louis Courier et la Restauration*》 Paris Garnier frères, 1913 /

Bibliothèque Nationale : 《*Paul-Louis COURIER*》 1972（生誕200年を記念しての展覧会のカタログ。数多くの貴重な原資料に関する説明。） /

Michel Crouzet : 《*Une écriture du défi*》 Éditions Kimé, 2007

本池 立 : 『ナポレオン 革命と戦争』世界書院 1992年